
ハシバミの樹

神代翁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハシバミの樹

【コード】

N6817X

【作者名】

神代翁

【あらすじ】

幼馴染が虐待を受けている。

らしい、というのを僕は知っている。隣に住む彼女を時折、洗濯物を干すときなんかに見かけると、青黒い痣と真っ白な包帯に蝕まれた彼女を見るからだ。この光景から連想できる言葉は暴力だが、暴力と家庭環境の悪化と不備から連想できるものを僕は虐待しか知らない。

彼女が痛むのを見ながら、彼女がすり減るのを感じながら、最も付き合いの長い友人が壊れるのを我が身の事のように思いながら、努めて僕は気にせずいつもどりに過ごす。彼女のいない日常を、漫然とただ歩くように過ごす。

冷たい？ いやいや、皆様は随分と心優しい方々なのでですね。所詮は他人ですよ？ 心中察する事が出来ようとも、完全に理解しあうことの無い関係ですよ？ よくもまあ助けるなどという大義名分を掲げてズカズカと他人の、純白の羽毛を敷き詰めた、他人が入れば壊れてしまうような空間に立ち入れますね。

僕には無理です。

人に裏切られると、助けられた痛みより強く、痛みを感じてしまいます。涙の前に吐き気がでます。

僕には無理です。

僕には、僕が関わる事で発生する諸々に付き合う術を持ちません。無責任なのです。助けたら、それで終わりではないのに。

僕には無理なのです。

例え、彼女が僕の支えだったとしても。

電撃小説大賞二次落ち。

リベンジ予定なので、メッタメッタに叩いて潰して摩り下ろしてくれば幸いです。

これから受ける方の指針になったりできれば、これ以上の喜びは御座いません。

プロローグ

その行為が始まったのはパパが死んでからだった。

「
」
無言のままに、髪を肩口で切りそろえた女が私を殴打する。右の拳で肩口を、左の拳で鳩尾をそれぞれ殴る。殴られる度に私の呼吸は乱れ、鳩尾に拳がヒットして私は床に崩れ落ちた。

私、何で殴られてるんだっけ？

その疑問の答をきくと、私は知ってる。

ただ、理解が出来ないだけだ。私とこの女コトの思考回路は違いすぎて、この女にとっての当然は、私にとっての当然では絶対でない。

蹲っている私を蹴り飛ばし、背中を踏み砕くように踵を落とす。気が付けば口の中に血の味が広がっていた。口腔を満たしていく鉄の味を噛み締めながら、亀のように体を丸めて女の攻撃から身を守り続ける。

こんなのは突発的な嵐みたいなもの。

いずれ通り過ぎていく。

その筈だった。

「えっ………？」

最初に感じたのは違和感。左腕の側面一杯に鋭い何かを通り過ぎる感覚。

次に感じたのは熱。

真っ直ぐな線が熱を持ち、次の瞬間痛みになる。

「嘘………」

キラレタ、目の前の女に、包丁で腕を切られた。

「嘘」

もう一度呟いて、無事な方の右手で左腕をなぞる。べっとり血が手に付いて泡肌立つ。血は鼓動とは関係の無いリズムで流れ出す。それはつまり、静脈を斬られたということ、どす黒い血が私の体

を汚してく。

目の前の女が微かに微笑み、包丁をその辺に捨ててまた私を殴りだした。

拳に対してなのか、それとも腕の痛みに対してなのかはわからなかったけど、私は「痛い」と叫び続けていた。拳打を私に打ち込み続けていた女はやがて満足し、部屋から出て行った。

私の体には鈍痛が残っていたけど、それらを無視して腕の状況を確認する。肘から手首まで、真っ直ぐに切れていた。最初は気が動転して大きな怪我に感じたけど、今見るとそうでもない。肉の層まで刃は届いていたが、手で押さえれば止血は出来る。死にはしない程度の怪我だ。

私は立ち上がり、部屋の隅に置かれている机の上から包帯を取り、腕をきつく圧迫しながらそれを巻いた。いざという時の為に学んでおいた止血法が役に立った。

血が止まったことでピンと張っていた緊張の糸が緩み、私の意識は遠退いていった。

目を覚ましたら部屋は真っ暗だった。壁に掛かっている割れた時計を見ると、時刻は午前二時らしい。

「こんな生活してたら、いつか死んじゃうよね？」

私以外に誰もいない部屋で、私以外の誰かに問う。そして問いの内容に背筋が震えて、リアルな恐怖で頭が埋め尽くされ歯が鳴りだす。

嫌だ！

私は

死にたく

ない！

嫌だ嫌だ！

私は

死にたく

ない死にたくない！

死にたくない！

私は

幸せに生

きていたい！

どうすればこの状況から抜け出せるかを真剣に考える。

学校には暫く行かせてもらってない。友達もあんまりいない。一度

捕まりかけた事があるから、警察には頼れない。児童相談所は動き出すのに時間が掛かり過ぎる。

私は今、この時、真後ろにいる死の恐怖から逃れたいのに！

私は今、義母と、仮にも母と呼ぶ女性から逃げ出したいのに！
だけど、私は逃げてはならない。

逃げてはならないから、より一層辛いのだ。

今ここで逃げてしまったら、確実にパパとママの思い出は捨てられる。私のアイデンティティを構成しているものを、命と同価値の思い出は守らなければならない。

どうやって？ 分からない。だけど、守らなければならない。

その時、視界の端に写真が映った。それは、パパが生きていてママがまだいた頃の写真。その写真にはパパとママと私の他に男の子が一人映っていた。屈託ない笑顔を浮かべて男の子はピースサインをしている。小学校何年生の時の写真だろうか。

これだ、と思った。

彼しかない、と感じた。

私は椅子から立ち上がり、あの女が私を痛めつける為に使うバッドを手に取りベランダに出た。そしてベランダの淵から乗り出して、バッドを力なく振った。一度目で窓ガラスに罅が入り、重力に引かれる様な二撃目でそれが蜘蛛の巣のように広がり、残りわずかな力を全て込めた三回目で窓ガラスの中央に十センチほどの穴が開いた。部屋の中に戻り私は手紙を書いた。携帯や電話が使えればいいけど、生憎と私は携帯を取り上げられており、電話は今掛けても彼は出てくれないだろう。彼の家の郵便ポストは彼の叔父からの手紙で一杯だから、彼は開く気にもなってくれないだろう。

乱暴だけど、私に興味を持ってもらうにはコレしかない。

縋り付く様な想いで手紙を書き、丸めてガムテープでぐるぐる巻きにし、それを隣の家に投げ込んだ。

プロローグ（後書き）

前にもこの小説を投稿していたのですが、三分割で出してしまい大変読みにくかった。という意見を頂いたので、その教訓を踏まえて小分けにして投稿したいと思います。読みかけだった方、申し訳ありません。朝と夕に投稿していこうと思いますので、苛立ちを沈めてお付き合い下さい。

一枚目！

1
生きてる理由を考えた事があるかい。
僕は、いつもそればかりを考えていた。

朝起きたら部屋の窓ガラスが割れていた。

窓ガラスは内側に向かって割れており、それはつまり外から割られた事を意味する。僕の部屋は二階で隣の家との距離は一メートルもない。

「……何で？」

何で、どうしてガラス割れてるの？

状況的に考えて、犯人はお隣さんだろうか。それとも、別の誰かか、何かか。

とりあえず散乱するガラス片を片付け、学校に行く準備をし、業者に連絡をしておく。放課後に窓を直す事に決め僕は家を出た。

公立の僕が通う学校は徒歩二十分ほどの所にある。

教室に着いた僕は窓ガラス割りの犯人と思われるお隣さん。つまりは、幼馴染の姿を探した。

そのうち授業開始のチャイムが鳴り、先生が入ってきた。それでも、真っ黒に染めた前髪で自分の顔を隠しきった幼馴染は現れなかった。今日も休みらしい。

普段と変わらない、変わり映えのしない学校生活が始まる。

賑やかな教室の中で僕だけが異質で、僕の周りだけが円状に静かで、クラスの異端である僕は黙って黒板を見つめ続ける。授業中に先生が飛ばしたギャグを聞き流し、静かに静かに、何かから隠れるように、出来る限り僕がここにいた痕跡を残さないように、隠忍自重で勉強をする。

僕が気配を消しているのも、姫宮という名字のお隣さんが学校にきていないのも、入学式より数えてひと月の今では当たり前前の事になっていた。

やがて午前中の授業が終わった。

昼飯を食べてから薬を飲む。薬を飲む行為が習慣化して以来、水を使わずに何錠でも飲むようになっていた。

「黒澤、ちよつとこつち来い」

放課後、担任の先生に呼ばれた。何だろう、と訝しげに首を傾げながら教卓の横に着くと……。

「姫宮は体調悪いのか？ かれこれひと月学校来てないけど」

「わからないです」

姫宮灰香。それは僕の幼馴染で家の窓を割った、現段階での犯人候補の一人。

素直に返した僕の返事に、先生が不服そうに言葉を足してくる。

「お隣さんなんだから。もうちよつと何かないか？」

「……ないです」

少し考えてからそう返すと先生は、そっか、と頷いて僕にプリントを渡してきた。今日の分のプリントらしい。入学式以降、学校に来なくなつた彼女にプリントを届けるのが僕の役目になっていた。手入れをしていないボサボサの髪を掻き揚げながら先生が言う。

「それと、お前も顔色が悪い。ちゃんと栄養つくもん食えよ」

「わかりました」

ペコリとお辞儀をして教室を出る。

姫宮は中学校二年の時も不登校だった。とある事件を起こし不登校になった。それが中学二年生の時の姫宮。

中学校二年生までの彼女は綺麗な子だった。

儂げで、清楚で、脆く傷つき易い。

ただど彼女は裏返つた。性格がとある事件で、裏返つて、逆さになつて、豹変した。

変貌を遂げた証拠に髪を黒く染めて。

変容を遂げた証明に顔を髪で隠して。
変質を遂げた自我を心の内に秘めて。
だけど、今回は違かった。

姫宮の父親が入学式の最中に倒れて、痙攣が止まった姫宮の父親に養護教諭が心臓マツサージをしていたのをよく覚えている。心臓マツサージを続ける養護教諭の額には汗が浮かび、父母達が半端に腰を浮かせて見守る中、姫宮の父親は死んだ。

その一瞬前まで確かにあった生气というものが消え去るのを僕は見た。苦しみで固定された顔、中から何かが飛び出しそうな程見開かれた瞳からふつと、風に連れて行かれたように生气が消えて、目玉はガラス玉の輝きに落ちた。

誰かが叫んだ。

それは、姫宮の父親の隣に座っていた女性だった。女性　姫宮の義母は、他の誰が叫ぶよりも速く叫んだ。倒れて動かない姫宮の父親にすがりついて、何度も何度も名前を呼ぶ。皆がまだ命が無くなつた瞬間に茫然自失としている中で、一人だけがひび割れた声で泣いていた。彼女の膝の上に座っていた少女がとことこ姫宮の義母の所まで歩いていき、彼女はその少女を外敵から守るように抱き締めた。

その時、姫宮が人垣を割って父親の死体に近づいてきた所だった。父親の死体を一瞥し、何事か口の中で呟いた姫宮は、ふらふらと歩いていた少女に手を伸ばした。彼女の義妹に手を伸ばした。

姫宮の義母にとっての外敵とは、姫宮だったらしい。

なおも手を伸ばした姫宮に義母は一言「触れるな」と囁いた。間に何人いようと届くほど、憎しみの炎を込めた言葉。遠くで聞いていた僕にさえ鳥肌が立ち怖気を感じた。

やがて姫宮の義母は女性教諭に連れられて体育館から出て行った。ただ一人、姫宮を残して。

それから彼女は学校に来ていない。

そんな事を考えているうちに、姫宮の家の前に着いた。

姫宮の家は僕の家と同型の一軒家。赤っぽい色を基調としており、土地の関係で細長い形となっている。家には小さい庭があり、そこには物干し竿がでんと一つ置いてあった。彼女の家は今、女性しかないなので防犯の為に下には洗濯物を干さないのだ。

家の二階、洗濯物が干してあるベランダを眺める。空中にせり出したあの場所からなら、僕の部屋の窓までは一メートルもないだろう。そんな事を考えながらインターフォンを押し、僕が来た事を伝える。いつもなら返事は無い。

『……ねエ、窓ガラス割れてたでしょ』

だけど今日は違った。珍しく姫宮がインターフォン越しに僕に話しかけた。

「姫宮さんがやったの、アレ？」

『違うよ。天使がやったの』

「そっか。天使か」

一月ぶりの会話も意味が通じなかった。意志の疎通が出来ない会話に意味はあるのだろうか。今の僕には、あってもなくても意味は変わらないけど。

『ところで、いつからだっけ。私の事、名字で呼ぶようになったの』
久しぶりに聞いた彼女の声は、少しだけ震えているように感じた。
何かを我慢しているような、何かを期待しているような、そんな微細な震え。その震えに気付きながらも、平淡に僕は言葉を返す。

「……二年前かな」

『早いねエ、あつという間だった』

特徴のある語尾の伸ばし方が気になる。自然な伸ばし方ではなく、何かを意図した、無理やりな感じのある余韻。

中学二年生の時だった。「灰香」と名前を呼んだ同級生の首を姫宮が絞めた。

笑いながら名前を呼んだ子を、泣き笑いの顔で首を絞めた。

壊れて破綻した歪な笑みだった。笑いたくないこと、信じたくないことを、認めてしまつて、笑うしかなくなつてしまつたような、そ

んな笑み。

首を絞められた子はそれから二週間は首に痣がついていて、痛々しかったのをよく覚えている。

その事件以来、彼女のことを下の名前で呼んだ者はいない。

狂ってるんじゃないの、アイツ。

誰かの声が頭の中に再生され、胸がざわついて生唾を飲み下す。

『それじゃア、またね』

一方的に通話が切れた。僕はいつも通り、プリントをポストに押し込むと隣の自分の家に帰った。ポストは、僕が今まで届けたプリント類や新聞等で埋まっていた。

何で僕は彼女にプリントを届けているんだろう。わざわざ届ける必要なんて、ない筈なのに。

その疑問に対する答えは見つからず、僕はポケットから錠剤ケースを取り出し、不安を消そうとするように錠剤を飲み込んだ。

今日は疲れた。

靴を脱ぎ散らかし、階段を登って、制服のままベッドに潜り込んだ。

「制服、しわになっちゃうな」

自嘲気味にそう呟いて、睡眠薬をいつもより二錠多く飲み込んだ。

一枚目！

2

次の日。

今度は隣の部屋の窓ガラスが割られていた。

割られているのに気付いたのは風呂上り、洗濯物を干しに来た時だった。我が家のベランダは妹の部屋を通らないと出られない造りになっている。

音で起きないのは僕が睡眠薬を飲んで眠っているからだけど、割れた窓ガラスを見た時僕は思わず頭を抱えた。このまま窓ガラスが割られ続ければ最悪バイトを増やすしかない。勉強の時間は確保したいけど、それすらも仕方無い。

放課後。

僕は薬の残りがなくなっている事に気づき、帰り道を急遽、行き着けの病院へと変えた。

白代総合病院という古びた飾り文字を見上げながら病院に入る。外科から内科、泌尿器科から精神科までであるこの病院は正に総合病院だ。

僕はいつも通りエレベーターで四階に上がる。

「そろそろ来ると思っていたよ、黒澤明君」

部屋に入ると柔和な笑顔を湛えた中年医師がいた。胸の所に止められたネームプレートには「精神科医 新城 真」と書かれていた。

「すみません。いつもの薬をお願いします」

医師は頷くと傍らにいた看護師さんに薬を処方するよう言いつけた。医師が僕に背を向けてカルテを書き出す。僕はいつも通り、古びたソファアに座ってソレを待つ。

今時珍しい古ぼけた置時計がカチコチと時を刻んでいく。

「そういえば、君がココに来るようになって何年経ったかな？」

ふと思い付いたという調子で新城医師が僕に尋ねた。

「四年目です」

「まだ、忘れられないかい？」

その質問に僕は何も返さなかった。この質問は此処に来る度繰り返される問答だし、答えのないのも問答のうちだ。

やがて新城先生がカルテを書き終わり、看護師から受け取った薬を僕に手渡してきた。薄緑色の精神高揚剤と白い睡眠薬、それから蒼い精神安定剤の三種類だ。割合は睡眠薬が一番多く、精神安定剤が一番少ない。

「あまり常用的に使うのはよくないんだけどね。睡眠薬も抗鬱剤も麻薬の親戚みたいなもんだからさ。はまっちゃう人もいるんだよ」
抗鬱剤と薬の事を言われるのは嫌いだ。皮肉を込めて、「僕ももう薬が必要ないですか？」と訊ねた。

「どうだろうね。薬効成分で君の脳内物質の働きを活性、あるいは減退させる事によって感情はある程度コントロールでき、大半の人はソレで脳が正常化して必要なくなるんだけど、君の場合はどうだろう。薬よりも、人間関係において何かしらの進展があった方が薬より効くのではないかと私は思っている。原因がそこにあるんだからね」

この人は正直だ。

だから 苦手だ。

僕は手短にお礼の言葉を述べ、病棟四階の精神科室を後にした。

どうやら僕は、正常ではないらしい。

こんな日でも姫宮へのプリントは届けなければならぬ。いつものようにインターフォンを押して待つと、昨日に引き続き珍しく今日も返答があった。

『窓ガラスが割れてたでしょ』

「……割れてたよ」

昨日と同じく震えた声。その声に僕は、きみがやったの？ そう問

いかける事はしなかった。彼女が僕に尋ねた時点でそれは確定に等しいからだ。

『アレはね、悪魔がやったの』

彼女の、鈴が鳴るように軽やかな声を聞いた瞬間だった。

「……ふ　ざけるなよッ！」

怒りが火のように弾けて、インターフォンに向かって叫びつける。

「お前はお遊びかもしれないけどな、僕は生活が掛かってるんだよ

！　お前の遊びに、僕をつきあわせるなよッ」

肩で荒い息をつく。

僕の病気は「外傷後ストレス障害」というものだ。自分が死にかけたり近い人が同様の状態になることで発症する事がある精神病。

自分の心が、自分でコントロール出来ない。同じ病気でも僕はマイナスに位置する為、何かしらがあった時、僕の心は暗く沈む。だから、こうして声を荒げる事は珍しいと、自分の中の冷静な部分が考えていた。

『　なさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……』

気付くと、彼女は引き攣った声で僕に謝り続けていた。ポケットに入っている錠剤ケースから、緑色の精神安定剤を一錠取り出して飲み込む。この薬にそこまでの即効性はないのだが、精神的に幾分か楽になる。

「別にいいよ」額の汗を拭う。「本当は、よくないけど」と言うてから、ポケットに錠剤ケースを戻す。

『天使の贈り物は届いた？』

懺悔の余韻を秘めて揺れた声。その声でもって、謝罪の気持ちはありながらも、あえてそれらを無視してまで僕に何かを伝えようとしているようだった。

「……ハア？」

意図が分からず、不快感を込めて聞き返す。

『悪魔の贈り物は届いた？』

ガチャ。と音を残してインターフォンが切れた。

何なんだよ、一体。突然謝ったり、意味のわからない事を言ったりして。

何をどうしたらいいのかわからなくなった僕は、思いつきり頭を引っ掻き回した。ブチブチと髪の毛が抜けたり千切れたりしてとても痛い。

だけど、その痛みで心が安らぐ。

それからはどうしたか覚えていないが、気付いたら僕は自室で寝ていた。

うたた寝から目を覚まし、腕時計の時刻表示を確認すると午後八時三七分だった。夕方の姫宮の言葉が気になり僕は立ち上がった。

天使と悪魔の贈り物。

僕の部屋をうろつくと歩きベッドの下を覗き込んでみると、丸い形に丸められた紙とガムテープに包まれた何かがあった。それを拾い、回してみると「Angel」と油性ペンで紙の部分に書いてあった。気になった僕は隣の部屋も探してみる事にした。

勉強机と洋服筆筒とベッド、それから幾ばかの物だけがある部屋に足を踏み入れる。

部屋に入り、物が入り込みそうな場所を探していると、辺りにタンパク質が燃えたような臭いと、ゴムを焼いた様な異臭が立ち込め、それと同時に吐き気が込み上げてきた。どうにかそれを我慢しながら探していると、勉強机の後ろから何かをガムテープで丸く固めた物が出てきた。書いてある文字は「Daemon」悪魔の古いつづり。

天使と悪魔の贈り物、そんな物の為に僕の家之窗ガラスは二度も割られたのかと思うと無性に腹が立って、その二つの物体を僕はそこらへんに投げ捨てて自室に戻った。着替えてある所を見ると、風呂には入ったのだろう。

睡眠薬を三錠飲んで嘘の眠りにつく

息苦しいほど湯気が立ち込め、自分の腕さえも見えない浴室。

私は暫く前から湯船に浸かっていた。

明への手紙を投げ込んでから暫くして、あの女が私に「風呂に入рина、臭いから」と告げた。

二週間ぶりのお風呂に心は躍り、意気揚々と私は浴室へと向かった。半透明のガラス戸の向こうで人影が時折チラつく。あの女が私を見張っているのだ。

「湯船から出たら殺すよ」

事も無げに告げられた言葉で、お風呂は拷問へと姿を変えた。日曜日以外では珍しい休日を、私を虐める為に使うあの女。

視界がグラつく。

吐き気が込み上げる。

手先は水分を失いしわしわでお婆さんのよう。

あの女の影が消えると同時に私は蛇口から冷たい水を飲む。その冷たさで頭がガンガンと鳴り目眩が加速する。

蛇口の水を止めると同時に女が更衣室に現れ、浴室と更衣室をわけるガラス戸に鍵を掛けた。

何？ 何をする気？

ゴボンと音がした。

「熱ッ」

あの女は追い炊きをしていったらしい。慌てて追い炊きを止めるが、温水の吐き出し口に接していた左太腿を火傷した。浴槽から出て冷たい水で太腿を冷やしていると誰かが外に出ていく音が聴こえた。

十歳の義妹は絶対に外に出られないからあの女に違いない。

逃げよう。

この状況下で、それは当然の帰結だったかもしれない。だけど、かなりの勇気が必要とするものだった。

この家から逃げよう。

思い出に囚われて死ぬなんて、本末転倒もいいところじゃない！
そう意志を固めた私は立ち上がり、ガラス戸に体当たりをした。ふ

らつく足でした体当たりは威力なんて無いに等しかったけど、十分間も繰り返して続けているとガラス戸が外れて私は外に転がり出した。冷たい外気が肌を舐めていく。その心地よさに一度目を瞑ってから起き上がる。その足で二階に上がり、服を適当に見繕い、どこかオカシイところは無いかと割れた手鏡でチェックする。

「髪の色、落ちちゃった……」

母譲りの白っぽい金髪の下に疲れた目の私がいる。最後に染めたのは一月以上前で、長時間湯船に浸かっていたから仕方無い、そう割り切った。

時刻は正午をとくに過ぎていて、朝から何も食べていない私の胃が鳴る。

あの女の部屋を漁って幾らかのお金を得た後、私はひと月ぶりになる屋外に飛び出した。

色 音 光。芳香。人 音、人 電子音 人々 臭い

有象無象。

男……女……男男女女。若い……と……老い。多種多様 孤影悄然
和気藹々。

夜の繁華街は様々な人と物に溢れかえっていた。久しぶりに見る外に私の胸はときめき、それと同時にどうしようもなく悲しくなった。本当なら、私もあの中にいただろうか。

仲睦まじく歩くカップル。狂喜乱舞する男女。

どこで、間違っただろうか。

「アレ？ アレレレ？ ほの 姫宮さんじゃあん！」

物思いに更ける私に誰かが声を掛けた。

「超っ懐かしいじゃん！ え、なになに？ 元気してた？ っつーか髪の色元に戻したの？ やっぱそっちの方が似合ってるよ。つかマジ可愛いつす！」

馴れ馴れしく声を掛けてくる顔面ピアスだらけの男。

「……若本、君？」

「え、マジで？ 覚えててくれたの！ 超っ嬉しいわー」
忘れられる筈がないでしょ、その一言を飲み込むのにどれだけ苦労したか。

若本剛志は以前私に告白した男子だ。断った私を力づくで組み敷いた男子でもある。その時は先生が通りかかって助かったけど、忘れられる筈もない顔だった。

若本はニヤニヤと汚く笑いながら私の肩に手を回してきた。反射的にそれを払うと「あ？」と不機嫌そうに鼻を鳴らし私を睨みつける。「あの、触らないで」

それだけを搾り出すと、

「悪い悪い」

へらへらと笑いながら今度は腰に手を回してきた。私を逃がさないように腰のベルトを掴んでいる。そして、そのままグイッと横道に引っ張られた。引きずり込まれた路地の先を見れば、青いライトで照らされたホテル。

ツツツ！

もしかしたら違つかも、なんて考えなかった。

私が驚いている隙に若本は私の首元に舌を這わせていたからだ。

「嫌ッ！」

体を滅茶苦茶に揺らす 若本の手は外れない。それどころかより強く私を抱き締める。

若本の顔に爪を立てる 私の腹に一発、膝蹴りが入る。

呻く私を若本はホテルへと引きずっていく。

「助けて」

夜の喧騒に紛れて声は消えていく。絶望に頭が塗り固まった瞬間、若本が生ごみに足を取られて滑った。

「うわっ、た」

若本が壁に手をつきベルト掴む力が弱くなる。私はその隙を流さず全力で路地の外へと飛び出した。壁のように連なる人々の群れに無理やり入り込み、どこを目指しているかも分からないほど全力で走

る。
後ろから聞こえてきた若本の怒声は、私の走る速度をさらに上げた。

一枚目！（後書き）

今更ながらに、消えてしまった閲覧回数が恋しい……。

三枚目！

3

次の日。

またしても僕の部屋の窓ガラスが割られていた。業者にきてもらって僅か二日。真新しい輝きのガラス片が、フローリングの床に散らばっている。

それを確認した僕は思わず膝をついた。

僕の完敗だ、もう許してくれ。そう悪態を吐きたくもなかったが、吐く相手がいないので掃除を始める。すると、壁の近く、わりと目立つ位置に「Demon」と書かれた丸い物体が落ちていた。悪魔が二個目。まさに、僕にとつては正に悪魔だった。

僕はひと月に十数回、不定期のバイトをしていたが、窓ガラスが連続で割れて威風堂々としていられるほどの貯えはない。こうなってしまうた今、バイトを増やさざるを得ない。

いつもより多めに精神高揚剤を飲み下してから学校に行く。

まいったな。

昨日は怒れたのに、今日は怒りが微塵も湧いてこない。ただ空しいだけだ。

昼休み。

屋上に出てから僕は電話を掛けた。屋上は僕の他に誰もいなく、落下防止柵がぐるりと屋上を囲み、給水塔が影を落としている以外には何もなかった。僕は給水塔の影に座り込む。

電話の相手は中学校時代の数少ない友達。『僕』に『人』と書いてユートと読ませる一風変わった名前の持ち主。

『ああ、はい、ユートです』

三枚目、酷く眠そうな声で電話の相手が電話に出た。

「ユート、僕。電話の音遠いけど大丈夫？」

ちょっと待て、とユートが言った。目を覚ます為に目薬でもさしているのだろう。中学校以前からの彼の癖だ。

『マイク壊れてるだけだから気にすんな。それで何だ。バイトでも紹介して欲しいのか?』

さっぱりとした声でユートが電話越しに話す。眠気は完全になくなつたらしい。

「そう」

ふむ。とユートは一瞬考え『螺子工場で螺子を見つめ続ける仕事があるな。時給は九百円。そこから紹介料で千円もらうけどな』

「時間帯は?」

電話の向こうでトントンと携帯を叩く音が聴こえる。規則的に鳴らされるその音は、僕の心音とピッタリと同じで、不思議な安息感を僕に与えた。

『螺子工場は午後三時から午前二時まで』

「お願い」

『あい、わかった。変わり者だな、お前。社会をドロップアウトした俺に電話して仕事貰うなんてよ』

ブツリと電話が切れる。階下からは音楽放送の音が、幾多の声と共に響いてくる。

どうしてだか僕は階下に行けず、給水塔の影から青い空を眺め続けた。

放課後。

螺子工場に急いで行こうとしていた僕は担任教師に呼び止められた。用件はどうせ姫宮のプリントの事だろうけど。そう当たりをつけて担任教師の前に立つ。

「姫宮が失踪したらしい。一応プリントは届けておいてくれ」

予想の斜め上に行くお答えだった。担任の先生 名前はそういえば知らない は無機質な文面ながら焦りを滲ませた声でそう言った。「はあ、わかりました」と気の抜けた返事を返した僕は、つい

でとばかりに聞いてみた。

「先生、名前なんてしたっけ？」

「……酒井紗希だよ。君に名前を聞かれたのは、コレで今月二回目なんだが、そろそろ嫌がらせだと思っただけいいか？」

顎のラインは細く鼻や唇の形も悪くない。目つきが気だるげなのが玉に傷だが、それを差し引いても美人と目をつけていい領域だろう。ただ、まったく見た目を気にせず、それどころか美容から最も遠い場所に自分を置き続けた為か、鼻眞目に見えても今の姿は美人には見えなかった。完全に宝の持ち腐れである。実に勿体ない。

「駄目です」

足早に教室を出る。現在時刻は二時三十分を回った所。目的の螺子工場は学校から丁度二十分ほどの位置だから、大体時間通りだ。

校舎の外に出ると、校門の辺りで髪を茶に染めた若者が、在校生の黒髪少女を相手にナンパをしていた。それを見て他の生徒がヒソヒソと何事が言い合い、中には教員を呼ぼうか、といった話まで聞こえる。

「だからさ、十分。いや、五分でいいからお茶しようよ」

「いや、あのう、私彼氏いるんで……」

若者は身振り手振りを加えて女生徒を口説いていくが芳しくないらしい。やがて女生徒が若者を振り切るようにしてその場から逃げだした。それを確認した生徒は一樣にホッとした空気を出した。

だが、若者はそれが気に入らなかつたらしい。校門を通ろうとする生徒の一人を捕まえて何事が話す。すると捕まえられた生徒は顔を青くして首を横に振っている。それを見た後、若者は口角を吊り上げてさらに何事が呟いてから生徒を離れた。離された生徒が逃げ出すのを尻目にしながら、校内に残る生徒一人一人に因縁をつけるように視線を這わせる。

と。

その視線が僕の視線とぶつかり、数秒間僕を見つめた後、視線の主が軽く手を挙げた。

すると

「いよお、お久」

軽い感じで僕に向かって手を振ってきた。手が振られるのにあわせ、両耳の髑髏形のピアスが太陽光を反射してキラリと光り、あわせて腰のチェーンも揺れた。

ユートだった。茶に染めた髪に、黒地を所々白く抜いたシャツ、色あせたジーンパン、鋭い目の光。完全にユートだった。見間違いだと願ったが、完璧にユートだった。

彼は僕に軽く挨拶をした後、校門の外側に止めてあった自前のバイクに跨った。ちなみにバイクも黒である。

辺りの生徒は僕の地味な外見とユートとのギャップに驚き目を白黒させていた。

何も言わずに僕がユートの後ろに腰を下ろす。僕とユートとの間に鞆を入れ、ユートの腰に手を回す。

「んじゃま、行きますか」

染め抜いた髪をヘルメットに押し込んだユートがバイクにキーを入れる。背後の生徒達のざわめきが大きくなる数瞬間に、バイクのエンジンがうなりを上げ間髪入れずに発進した。

螺子工場までは二十分で着く。ただし、バイクで。

僕らのバイト先の螺子工場は、建築から二十年ほどが経っている老工場だ。元は白く塗られた外壁も色落ちし灰色がかって見え、古色蒼然といった風体だ。ユートはバイクを工場の敷地内に止めているところで、僕はそれをただ黙って見ていた。

螺子工場でのバイトは初めてではなかった為、連絡事項や注意事項なども特になく仕事が始まる。

流れてくる螺子を、一つ一つ見て、形が悪く使えないようなら省く。この作業を七時間、休みは一度だけの三十分。ユートはかなり辛い、と言っていたが僕はさほど辛くもなかった。強いて言えば、椅子がないのが寂しいくらいで。

静かな、ベルトコンベアーの流れる音しか聞こえない静かな仕事場に、唐突にユートの話し声が聞こえた。

「幽霊を見た奴がいるってよ」

錆びた鉄骨に囲まれた敷地内。ベルトコンベアーを流れてくる螺子を見つめながらユートがそう言った。

「へえ、どんな？」

とユートの方を見もせず訊く。恐らく彼も、こちらを見てはいないだろう。

「姫宮の」螺子を選別していた僕の手がピクリと止まる。「幽霊だつてよ」ユートが話を続ける。

「昨日の夜遅くに、繁華街で見た奴がいるって噂だ」

「……何で姫宮だとわかったの？ というか、何でそれがユートの所に広まるほどの影響力を持った噂なの？」

「中学一緒だった奴が見たから。それで二つの答えにはなるだろ。髪の色、元に戻してたらしいぜ」

ユートが螺子を一つ選び取ってベルトコンベアーから出した。

姫宮の髪は英国人のお母さんの影響で白に近い金の髪だった。染めたのではなく、自然に輝く髪だったから繁華街の光の中でも目立った事だろう。

「それで、ソイツの友達^{タチ}が姫宮に声かけたら……中学二年生の時の繰り返しになったと」

「首絞めたの？」

「いや、人差し指を折られたらしい。相も変わらずおっかねえな。親父さんの再婚相手から虐待受けてるって噂もあつたけどよ、そんな噂がどうでもよくなるくらい、アイツ自身が目立つよな」

かかつ、とユートが軽く笑う。拍子木のように乾いた声。彼の笑い声は小学校の頃から力行のどれかに限定されている。

「虐待受けてるのは多分本当だよ」

僕の前に流れてきた不恰な螺子を外に出しながら、

「たまに窓から見た時とか、腕に包帯巻いてあったり、服もボロボ

口だったり、廊下がゴミで埋まっていたりしてたから」とユートに話した。

「……マジ？」

軽い笑い話ですませる筈だった話に信憑性が出たことにユートは驚き、反応が一瞬遅れる。ユートの声は笑っていた時よりも幾ばか真面目で、それは自分が踏む必要のない地雷をうっかり踏んでしまったことに対して後悔しているようだった。

彼は、見た目に反して情に厚く涙もろい。ユートが不良のように振る舞うのはタダの強がりだと僕は思っている。なぜなら、彼は今日校門でナンパをしている時も、他の生徒に絡んだ時も、無理して笑っていたからだ。

それは大多数の人は気付かないであろう嘘の気配。

だけど、かつて嘘に手痛くしてやられた僕には嗅ぎ取れる臭い。

いつかは彼に、彼の事を詳しく聞いてみたい。小学校からの付き合いながら、僕はユートの事をほとんど知らないのだ。家族構成も住所も知らない。その事に一抹の寂しさを感じながらも、あえてそれを意識しないようにユートの話題に乗る。

「マジ。普段はカーテン閉まってるんだけど、日曜日だけは義母がいて、掃除の為に窓が開いてるんだよ」

端的な説明を終えると同時に、作業終了を示すブザーが工場内に鳴り響いた。

「そういえば、何で幽霊なの？ 姫宮死んでないでしょ」

「忘れたのか、アイツのあだ名。幽霊だったろ」

そういえば、そうだった気もする。髪で顔を隠した姿が四谷怪談の亡霊のイメージにぴったりだったから、そんな理由でつけられたあだ名だったと思う。

作業着から普段着に着替え、今度はポスティングのバイトの為に外に出た。

螺子工場から出た後、僕とユートは繁華街近くのファミレスに入り遅い夕食を食べていた。

ちなみにこのファミレスは近所ではちょっと有名な所だった。数多あるファミレスの中で生き残ろうとこの店は試行錯誤を繰り返して、独自の進化を遂げていた。それも絶滅の可能性が非常に高い方向へと。意図がわからない謎メニューが多すぎるのだ。『新メニュー、イタリアリゾット風チャーハン』とはなんだろうか。リゾットなのだろうか、チャーハンなのだろうか。そしてイタリアなのだろうか、中華なのだろうか。明らかかな失敗臭を漂わせるメニューをなぜだかユートは毎回頼む。

そして今、彼の目の前にはグズグズになったチャーハンが置かれた。僕の前には至って普通のリゾット。ユートは若干頬を引き攣らせながらも「いただきます」と一言呟いてから『イタリアリゾット風チャーハン』を食べ始めた。時々聞こえる「ふぐ……う、おえ」という音は終始聞こえないふりを通した。

そうして遅い夕食が終わり、僕らは食後のティータイムを楽しんでいた。ティータイムといっても、ドリンクバーのジュースなので厳密にはティータイムではないが。

謎のメニューを食べたせいで若干顔が青いユートがグラスを片手に僕に尋ねた。

「そっぴやお前、今日も学校あるだろ。寝なくて大丈夫なのか？」

「眠れないからね。睡眠薬がないと」

その質問に僕は自嘲の響きを込めながら返した。ユートは呆れたような目になって言う。

「中毒者みたいになってんな、お前」

その言葉は意識して出た言葉ではないだろうが、それでも少しだけほんの少しだけ僕の心を傷つけた。

ユートがコーラとメロンソーダとレモンスカッシュを混ぜて作った『ユートブレンド』という美味しそうには見えない飲み物を飲み下していく。

「それでお前、どうすんの？ 姫宮探すのか？」

「何で？」

怪訝気味に僕が聞き返す。

「何でつてお前、姫宮さんと仲良かっただろ。お前が壊れてた中学一年の時とか、俺は大丈夫か、つて言うくらいだったけど、姫宮さんは突き飛ばされようが何されようがずっとお前の傍にいただろ」「いたけど、何で？」

皆目見当がつかない。僕が姫宮を突き飛ばしたりしたのは本当で、彼女が僕の傍にずっといたのも本当だけど、それが何かしらの理由になるとは思えない。

「何でつて、お前……」

ユートが僕を呆れたような目で見ている。そんな目で見られても、僕も困る。

「助けてもらったら助けてあげなきゃいけないの？ 僕が頼んで助けてもらった訳でもないのに」

そして、本当の意味で助けてもらったわけでもないのに。黒くて冷たい感情が胸中でとぐるを巻く。

そんな僕を見てユートが冷めた口調で言った。

「人形君」

「？」

「お前の、中学校の時のあだ名」

僕はそんなあだ名で呼ばれていたのか。対して悲しくも無い。

緑の錠剤を口に含み、野菜ジュースで飲み込む。ちなみに、この薬は噛み砕くと効き始めるのが早くなるかわり、物凄く苦くて不味い木の根っこの様な味といえいいだろうか。

「どんな時も無気力で、決まった応対をして、笑えと言われたら笑えて、変わってねえなあ、お前」

呆れ顔を苦笑に変えてユートがそう言った。

「ユートは変わったね。何で高校行かなかったの、頭良かったじゃん。確か、偏差七十以上あったでしょ」

皮肉に皮肉で返すとユートが昔を懐かしむような目になり、

「おーおー、懐かしいね。まあ、それは聞かないでおいてくれや。

……そういや、バイト代の一割貰ってねえぞ」

話をはぐらかした。

僕が財布から今日のバイト代の一割、千円を渡そうとするとユートがそれを手で制してこう言った。

「お前助けてやれよ。姫宮さんの事。努力だけで一割のかわりにしてやるよ」

「……面倒」

「もうバイト紹介しねえ。短期で即日入れるバイトなんてそうそうないぞ」

「……何で僕が……」

「ああいう子つてのは、内に色々溜めちゃうもんなんだよ。何かサインなかったか、助けてくれーみたいなの？」

「窓ガラス三枚ぶち抜かれた」

「……変わったサインだな」

「嫌がらせの間違いでしょ。天使だか悪魔だか知らないけど、そんなの贈り物の度に窓ぶち抜かれてたんじゃ家計が苦しくて苦しくて「ちよい待ち、今なんて？」

ユートが口を付けていたグラスをテーブルに置きながら言った。

「嫌がらせの間違いでしょ」

「そこじゃなくて、天使らへんから」

「天使だか悪魔だか知らないけど、そんなのの贈り物の度に窓をぶち抜かれて」

「贈り物って事は、何かきたのか？」

「きたよ。紙をガムテープでグルグルまいた奴。手紙かなんか入ってそうなのやつ。そんなのだけで窓ガラスを抜ける筈がないから、何か工夫してあるんだろうけど」

ユートは僕の言葉を聞き、ゆっくり咀嚼して飲み込んだ。そして理解が追いつくと同時に「すうう」と息を吸い込んで、

「馬ッ鹿野郎　！」

叫んだ。ファミレス内の数少ないお客さんが全員こちらを見るほどの音量。それを間近で喰らった僕は耳鳴りがしたほどだ。

なんなんだよ、いったい。

訝しさに苛立ちを込めた目で僕がユートを見つめる。

「それがサインだつつの！」

「……そんな漫画みたいな」

もしくはドラマみたいな。

「他に連絡手段がなかったんじゃねえの？」

「いつでも家にいたよ、僕」

「昼間会えない事情があつて、夜話したくても睡眠薬でぐっすり寝てるだろ、お前」

「否定はしない」

「普段何時に寝てる？」

「九時前」

「爺かよ、早過ぎるだろ！」

かぁー、と頭を掻き毟るユート。綺麗好きの彼はキチンと風呂に入っているらしい。頭皮の状態はバツチリだ。

「とりあえずお前、帰ってその届け物見る。んで、助けて欲しい的な事書いてあつたら助けてやれ」

ユートが僕をビシツと指指した。体を横に傾けても指は僕の頭を指したままだ。諦めて体勢を戻し嘆息の後に、それでも僕は「嫌だよ面倒臭い」と返した。

「もうバイト紹介しねーぞ」

先ほどよりも真剣味を増した声でユートが脅しをかけてくる。

「自分で探すよ」

それにも僕が屈しないのを見てユートも諦めたらしい。攻め口を変えたユートが最後の一言を僕に話す。

「精神科の先生も薬じゃ治らないとか言ってるんじゃない、お前の無気力症候群&情緒不安定」

薬よりも、人間関係において何かしらの進展があった方が薬より効くのではないかと私は思っている。

余計なお世話だ。ユートも新城医師も。

ポケットから錠剤ケースを取り出し、精神高揚剤ではなく、鎮静効果のある錠剤を一錠飲み込む。飲んだ後毎回やってしまったと思う。効き出す頃には怒りも何も収まっていてしまつて、無気力に拍車を掛けるだけなのに。

唐突に視界が眩み、頭が真っ白になった。耳の奥の方から、ぐわあぐわああん、と耳鳴りが響く。神経を直接こすつたような痛くて強烈な音。

耳を押さえて痛みにも似たその音が通り過ぎるのを待つ。

気付けば、ユートは目の前にはいなくて、ナプキンに赤いボールペンで「姫宮さんのことは俺も調べておいてやる。それと、明日もバイトあるからな。」と殴り書きが残してあつた。

伝票を持ってレジに行くと「お連れの方がお支払いしていただきました」と言われた。

余計なお節介なんだよ、全部全部。

心中

次の日も僕は学校が終わった後、螺子工場でバイトをしていた。ユートは卸売りの手伝いに行ってしまったので、今日は僕一人で流れてくる螺子を見ている。

今日はいやに歪な螺子の多い日だった。

同じ工場の、同じ機械で作って、同じ工程を経ているのに。

どうして歪になってしまうのだろうか。

だらつとした仕事の中でそんな疑問が心の中に沸々と湧き上がる。歪な螺子をライン工程からはじき出しながらも、そのことを考えてしまう。

もしかしたら、僕らもこの螺子のような物かもしれない。

同じ環境で生まれて、同じ教育を受けて、同じ歳をとって。

そしていつか、皆が個性を有す。

僕にはそれが歪みに見えて仕方がないけど、世間はそれを成長だと言っ。

そして、社会に対して害を為す大人を『成長の仕方を間違えた』とか『精神的にはまだ子供』って言い換える。

同じ環境で生まれて、同じ教育を受けて、同じ歳をとって。

同じ人間になる筈なんてないのに。

そもそも、同じ環境なんて有り得ないのに。世界レベルから見たら、同じように見えるかもしれないけど。それでも、人は人を、自分と同じ視点でみるべきではない。ほとんど同じでも、違うものは違うんだから。

午前二時でバイトは終わりだ。ブザーが鳴ると同時にベルトコンベアーがくぐもった音を発して動きを止めた。

更衣室で僕が作業着から私服へと着替えている途中でユートが現場から帰ってきた。そして僕の隣で着替え始める。

「それで、何か進展あったか？」

「……別に」

進展があつたも何も、気にしてすらいなかった。ただ、それをコートに感じ取られるのは癪で、わざとボカした言い方をした。その言い方にもコートは気にした素振りさえ見せず、あまつさえ僕を労うような言葉さえかけてきた。そして僕の意見を無視して勝手に話を始める。

「あんな、俺らの同級生でこの間指の骨を折られたやついたろ。ソイツが折られたつてのがまた傑作でな。折られてなかつたんだつてよ」

どういう事だろう。そう思いコートを見る。

「姫宮その時ボロボロの服を着ていたらしくてな。それを心配するフリをしてラブホに連れ込もうとして、抵抗されて、指脱臼したんだつてよ。それで脱臼した話を友達に愚痴つてたら姫宮さんのことを思い出して、何の気無しに話したら尾ひれが付いたと」

どうやら姫宮が失踪したという話は本当だったらしい。疑っていたわけではなかったが、今の話を聞いて現実味が急に増してきた。

着替え終わった僕は手持ち無沙汰にコートを待ちながら口を開いた。「尾ひれをつけやすかつたんだろうね」

なにせ、前科がある。噂にもなりやすかつただろう。

錆びたロッカーをコートが閉め、コートに続いて更衣室を出る。そしてそのまま工場の外に出てコートのバイクに跨る。別にタクシーやバスで帰ってもいいのだが、この時間にバスは無く、タクシーを使うとバイトをしている意味がなくなってしまうので僕はコートに送り迎えをしてもらっていた。

僕の頭上には満天の星が煌めいていた。工業地区にあたるこの辺りは山にほど近く、都市部からそれなりに離れているので星が良く見えるのだ。

次の日。

僕とユートは二人で螺子を見ていた。工場長に頼み込んだ結果、僕らはボロのパイプ椅子を借りることが出来た。おかげで今日は座っていられる。

「それで、何か進展したか？」

作業着に着替えている時から機会を伺っているには気付いていたけど、まさかベルトコンベアーが動いた瞬間に聞いてくるとは思わなかった。完全に意表をつかれた形の僕はそれでも普通に「別に」と返した。

「俺は進展あつたぜ」

チラリとユートを見ると、不敵な笑みを浮かべてこちらを見ている。いや、見下しているのかもしれない。無性に腹が立つ。

「進展あつたけど、確定じゃねえからまだ話せないけどな」

手元にあつた歪な形の螺子をユートに向かって投げつける。螺子はユートに当たることなく落ちて、カランと乾いた音を上げた。

それ以降は、肅々と、厳かに螺子を選別していく。

明日でバイトは一旦終わりだ。

そしてバイト最終日。

ベルトコンベアーの前で僕とユートは淡々と螺子を見守り続ける。

そもそも、会話が起き難いバイトなのだからコレが自然だ。

「この後、ちよつと付き合えよ」

最終日は十時までしかバイトがなく、バイトが終わった直後の更衣室でユートにそう言われた。僕としてはユートが送ってくれないと帰れないので素直に頷いておく。

ユートは行き先を告げなかったが、どうやら山へ向かっているらしい。帰り道とは逆方向へ真っ暗な道を進む。ライトが照らす道が揺れて見えた。

そうして連れてこられたのは、山の七合目に設置されている駐車場だった。二十台ばかりの車が止まれるだけのスペースに白線、それから自動販売機が一つとオレンジの光を落とす電燈が一つ、それだ

けがここにあるものの全てだった。

五月とはいえ夜の山は寒い。流石に息が白くなることはないものの、半そでの僕の背筋が震えるだけの寒さはあった。

「ほれ」

ユートが自動販売機で買ったコーラを渡してくる。

「……温かい」

「コーンポタージュ押したらそれが出た」

「温かいコーラなんて嫌だよ、ユートのと取り換えてよ」

奢ってもらった手前、生意気なことは言えないが、嫌なものは嫌だ。ユートは僕の言葉に薄く笑い、

「冷たいおしるこが飲みたいのか？ サイダー押したらコレが出たんだが、餅に至ってはガチガチだぞ」

と言った。それに対して僕は「ごめん」と一言返してから温かいコーラを飲みだした。恐ろしく甘い液体が口を蹂躪し喉を犯しながら胃に落ちていく。胸やけしそうだ。

そういえば、ユートが僕に対して嫌なことをしてきたことは一度もなかったな。

冷えたおしるこを食べているユートの横顔を見ながらそう思った。

「ガチるこ。ガチガチに凍った餅が入ったおしるこ、の略でどうだろっ」

「しらないよ」

ユートがチラチラとこちらの様子を伺いながら、ガチるこを飲んでいく。何か言いたいことがあるなら、言えばいいのに。

「姫宮さんさあ」

意を決したようにユートは話し始めた。

「全然普通だな、うん」

彼が知った姫宮のことを顧みて、そう納得して一人で頷くユート。ガチるこを食べ終わったユートは腕を組み、僕がコーラを飲み終わるのを待っているらしい。甘さというものは、温度が低いよりは高い方が断然甘いものである。そんなことを思っているうちに僕はコ

ーラを飲み終わり、空の缶を路上に置いた。それを待っていたユー
トが間髪いれずに話し出す。

「中学二年生の時、首絞め事件があったろ。あれって何で起きたと
思う？」

「……さあ？」

目撃はしたけど、理由なんて知っているわけがない。首を絞められ
た相手は誰だっけ？ 女生徒だったと気がするんだけど。

「三角関係は知ってるか？ 姫宮さんと、サッカー部の渡里と、大
空さんの」

「……ほう」

「初耳なわけだ。概要は省くけどさ、大空さんは渡里が好きで、渡
里は姫宮さんが好きで、姫宮さんは何も知らずに大空さんに頼まれ
て間を取り持ったわけだ。そしたら渡里がな、堂々と大空さんの告
白突っぱねて、突っ張ったまんま姫宮さんに告白したわけだ。フリ
ーズした姫宮さんに渡里は『返事は後でいい』とか言っただけだ」

渡里は確か、サッカー部のエースで部長だった筈だ。さわやかな笑
い顔と『狂ってるんじゃないやねえの、アイツ』という言葉が思い出され
た。

僕が路上に置いた缶をユートが拾って、自動販売機の横に併設され
ているゴミ箱まで歩いて行って捨てた。

「次の日なんだけどさ、姫宮さん断ったらしいのな。『好きな人が
いる』って。それでまあ、この話は終わりかな、と皆が思ったわ
けなんだけどさ」

続きがあつてさ、と言いながらユートがこちらに戻ってくる。そし
て僕の隣、バイクに横向きに腰かけるとまた話し出す。

「俺も昨日知ったんだけど、その日を境にして姫宮さんに対して虐
めが始まったらしくて。女子特有の集団攻撃ではなかったらしいん
だけど、かなりキツイものだったらしくてな。水泳の時間が終わる
と服がなくて、返ってこなかったりとか。下駄箱の中にゴミブリを

入れられたりとか。母親の悪口を言われたりとか」

水泳の時間が終わった後に服がなかったら辛すぎるだろう。そのまま水着で授業を受けるわけにもいかなければ、ジャージを着て授業を受けても下着がないし。男子でも辛い内容を思春期の女子が受けたのだ。ゴキブリも古典的ではあるが、効果はかなりある。

「大体わかるけど、母親の悪口はこの場合いらなくない？ 他のに比べれば大したことじゃないでしょ」

それに対してユートは何かを言いかけて、押し黙り、暫く悩んでから声を絞り出した。

「キリスト教ってわかるか？」

「宗教だね」

漠然としたイメージが僕の頭の中で踊る。十字架、イエス、ユダ、マリア、一神教？

「詳しいことはわからないんだけどよ、姫宮さんのお母さん、キリスト教の中でもかなりストイックな所の人だったらしくてな。腿に棘付きのベルトを巻いていたとかなんとか。それで、その母親のことを大空さんが大声で馬鹿にしたというか、なんというか。『イカれてる』みたいなことを言いふらしたわけだ。結果として、それが保護者に伝わって姫宮さんの母親はバツシングを受けたらしくって」「それで」僕が続きを促す。「それでどうなったの？」

「姫宮さんは結構どころじゃないくらい気にしたらしくって、それを言いふらしてる大空さんを見て、虐めとかも大空さんがやってるって気付いたらしい」

あくまでココは予想だけだな、とユートが付け足した。だけど僕は予想とか、そんなのよりもっとずっと大事なことを思い出してそれをユートに問い掛けた。

「……その話オカシクない？ だって大空さんって確か」

「姫宮さんの親友だな」

正しくは、だった。

中学二年生のある場面まで、彼女たちはいつでも一緒にいて、凄く

仲良さげに笑い合っていた筈だ。壊れる前の姫宮を思い出すとそこには必ず大空さんがいた。

ああ。

ここまでできてようやく、物分かりの悪い僕にも合点がいった。

だから、大空さんは首を絞められたのか。

二週間で痣が残る程、本気で。

姫宮がどうして、笑い泣きで、首を絞めていたのか。

それら全てが繋がった。

「わかったみたいだな。どうしてあの二人が仲違いして、しっぱなしなのか」

そう言つてユートは空を見上げる。

「それじゃ、異常だったのは姫宮じゃなくて大空さんの方だったのかな」

「……どうだろうな。ただ、俺はあそこまでヤラレたらきつと、姫宮さん以上のことをしたと思つぜ」

空を見上げたまんまのユートは一つ息を吐いた。

都市部よりも、工場よりも、空に近くて星が輝く場所で、星を見る。この行為しにどれだけの意味があつたかはわからないけど、ユートはそれで一応ふんぎりがついたらしい。見た目に反してユートは情に厚いから、人が知られたくないこと。今回で言うなら、姫宮の母の事、それから大空さんのことでも、もしかしたら落ち込んだのかもしれなかつた。

どちらが促したわけでもないけど、僕らはバイクに跨つた。150ccの小さな馬に跨つて、ユートはキーを入れエンジンを掛けた。帰り道、行きよりも速度を増したバイクの上で僕は風に負けないように叫んだ。

「なんでココまで連れてきたの！」

「お前！ 逃げるじゃん、こついうことから！ だから逃げられねえとここまで連れて来たの！」

失敬な。僕はそこまで臆病者じゃない。

「助けてやれよ！ 良い子じゃねえか！」

「……そんなこと、知ってるよ」

ボソボソとした声で言った。この言葉はきつと風に負けて流されてしまっただろう。

「あ？ なんだった！」

ユートには聞こえなかったらしい。

だけど、それでいい。誰も知らなくていいんだ、あの頃の僕の気持ちなんて。

心中（後書き）

サブタイトルのセンスの無さに、今更絶望w

手紙

5

ユートに家まで送ってもらってから数時間。僕はひたすらユートに言われた言葉を反芻していた。

『助けてやれよ！ 良い子じゃねえか！』

知ってるよ、そんなこと。伊達に十五年以上近くに住んでいたわけではない。

だけど、それでも、僕は姫宮の為に何かをすることが怖いんだ。

「助ける……って簡単に言うけどさ」

そんなに簡単なことじゃない。助けるっていうのは、そんなに簡単なことじゃない。ましてや助けられるなんてどれ程難しいか。

「消しゴム取って、とか。掃除手伝って、とか」

そんな簡単なノリで人生に関わることに関わっちゃいけない。誰にだって矜持プライドはあるし、見せられない秘密だってある。そこに『助けてあげる』なんて免罪符を抱えて踏み込んだじゃいけないんだ。もし、本当に踏み込むならその人の罪や痛みに一生付き合う覚悟を持たなければいけない。僕はそう思う。

だから、僕の手が無意識のうちに動いて登録番号から勝手に電話を掛けた時は本当に驚いた。

「あ……」

そんな声が漏れて、ベッドの上で一人嘆息した。呼び出し画面に表示されているのは、『僕』と『人』で『ユート』と読ませる、漢字の読みを完全に無視した名前を持つ男。そして電話が繋がると共に僕は喋りだす。

「もしもしユート、今すぐ来れる？」

そんな電話を受けたユートは、それでも二つ返事を僕に返しスグに電話を切った。耳にどこか物悲しい機械音が響き、通話を切ると、待ち受けの時刻表示で時間を確認する。

『午前一時 三七分 六秒』

どうやら僕はユートと別れてから二時間余り、一人で悶々と考え込んでいたらしい。そのことに苦笑いを浮かべ、僕はユートを迎えるために階下に降りた。

ユートはそれから十分程で来た。深夜の住宅街に気を使った控えめの排気音が聴こえ、僕が外に出迎えに出るとユートは僕の家玄関横にバイクを止めているところだった。バイクを止め終わったユートを尻目に、僕は家に入る。後にユートも続いて入り鍵を掛けた。そして何も話さないままに二階の僕の部屋に入り、僕はまた何も言わずに部屋を出た。姫宮曰く『悪魔と天使』の手紙を探すためである。

記憶に反せず手紙は妹の部屋に無造作に二つ転がっていた。僕はそれを拾うと自室に戻り、壁際に捨てられていた手紙を加えた三つをユートの目前に置いた。

「まさか、まだ開けてすらいなかったのか？」

恐る恐ると言った風に聞くユートに僕はコクリと頷いた。

「……まあ、お前だからな。少しでもやるきになった分だけ進展か。その言葉を皮切りに僕は古代表記の悪魔が書かれた玉を開けていく。ベリベリとガムテープを剥がしていくと、中からクシャクシャに丸められた手紙が見つかった。取り出した手紙をユートと隣りあって見る。」

手紙には、短い独白が綴られていた。

『あの人は良い人。母さん（ママ）私を置いていった、父さん（パパ）私を遺していった。ママとパパ、信じているモノ違った。だから別れた。あの人はとても良い人。だけど私の傍にはどちらももういない。』

「次いくよ」

悪魔の現代表記の手紙を開ける。

『あの女は嫌い。私を叩いて蹴って刃物で刺す。あの女の連れてきた子も嫌い。どうして私が世話をしなければならぬの。でも、私はあの女がいなければ生きていけない。自分でお金を稼いで、部屋を借りて生きていく。そんな事、高校も卒業していない私には出来ない。お金は稼げても、部屋が借りられない。此処から逃げたい。彼方へと走り出したい。でも、自分がどうなるかが見えるから逃げられない。あの女が私に唯一残っていた思い出を壊していく。壊して壊して、壊し尽くされた。』

そして、最後の天使の手紙。

『賛美歌は綺麗。高音が頭を揺らすの。私には神様の声が聞こえた。土は土に、灰は灰に、人は人に』聖書の一節を私に指し示してくれたの。だから神様、ありがとう。私は、あるべきものをあるべき形に戻します。』

最初の悪魔は柔らかい筆跡で、次の悪魔の手紙は乱れた字で、最後の天使はどこか角ばった字で。それぞれに愛情を、憎しみを、狂気を込めて書かれていた。

この独白はきつと、僕に何かを伝えたかったのだろう。

だけど、僕には何も伝わらなかった。

彼女の為に何かしようと思って動いたけど。

それでも、ココまでできてなお、心が揺れることは無かった。

窓ガラスを割られたことが、今になって重く僕に押し掛かる。

「この手紙ってどういう順番で送られてきたんだ？」

「随分と洒落っ気のある郵送方法だね、窓ガラスをぶち抜くなんて。最初に天使、次に悪魔、最後に古代語表記の悪魔」

思わず毒を吐きながらも説明はキチンとした。

「これ、何で悪魔が二つあるんだ？」

「……さあ？」

「古い綴りの悪魔はどういうスペルなんだ？」

「Daemon」

ユートに手元の紙を見せる。

「デーモンじゃないな、それ。ダイヤモンドだ。多分」

「ダイヤモンドって何？」

「ギリシャ神話で守り神だ。それが度重なる宗教上の衝突で多宗教と混ざった結果、キリスト教では悪魔になったと言われている。そう考えると、この手紙に書いてある人物は、守り神が本当の両親。^{ダイヤモンド}

悪魔が義母。天使が……自分か？」

今更になって思うが、どうして僕は高等教育を受けていないユートに物を習っているんだろう。学歴的には僕が進んでいるのに、何故だかちつとも勝てる気がしない。そのことが少しだけ悔しくて、わざと素っ気無く言葉を返す。

「かもね」

「かもねって……オブラートに包んであるけど、中々ヤバソウな事書いてあるだろ。手遅れになるぞ」

おいおい、と言った風にユートが僕を説き伏せようとする。

「手紙が最初に送られてきたのは先週の日曜日、月、火と続いて、今が金曜日。どうにかなるならとっくになってるよ」

ユートは正しいのかもれない。だけど僕には、正しいことよりも前にこの問題からの逃げ道が見えてしまっていた。流されやすい僕はただ漫然と、その逃げ道に身を任せるだけだ。

「むう。どう考えても助けて欲しいか、止めて欲しいように思うんだが。だって、本当に何かヤルなら犯行予告なんて邪魔なだけだろ？」

助けて欲しいか。

助けて欲しかったな、僕も。

手紙（後書き）

ここまで読んで頂いている方、有難うございます！

そろそろ話が動き出しますので、言える身分じゃないけれども、
うごく期待w

惑い

6

次の日。

この間目が眩んだ事が気になって僕は新城医師を尋ねていた。

「心理的なモノだと思っよ」

新城医師はそう言った。番茶を啜りながら話を続けていく。

「君は無気力で情緒不安定という、さもすれば真逆の状態を内に飼っているわけだ。相反するそれらが邪魔をして君は感情というものが時たまわからなくなっているようだが、その状態の時に、発散することも出来ずにイライラ。ストレスを貯め過ぎたんだろう。だから目が眩んだのは、脳が君を守るためにとった防衛措置の一つではないかな」

新城医師が茶碗をテーブルに置いた。

新城医師の話聞きながら思ったが、新城医師はよくよく見るとブルドッグに似ていた。決して不細工ではないのだが、何だろう。妙な安らぎを覚える顔だった。

「あ」

その顔に安らぎを覚えていると、しまりの悪い口から一音、外に飛び出した。

「あ？」

僕の口から漏れた音に敏感に反応する新城医師。

「友達の話なんですけど」

今更何でもないです、と言えない不思議な空気が辺りに立ち込めていた。マズイと思いつつも僕の口は語りだしてしまう。

「君が友達の話？ 珍しいね」

「話してもいいですか？」

「どうぞ」

僕は、姫宮が僕の家の窓ガラスをぶち抜いて手紙を郵送してきたこ

と、手紙の内容の事、それからユートとの会話や昔何があったかまで全てを新城医師に話した。

「……大分、凄い状況になっているね」

「はあ。まあ大分」

「しかし本当に、君が苛立ったように話すなんて珍しいね」

苛立って、話していたのだろうか。僕は。

ワカラナイ　自分の事なのに判らない。

「僕は、どうするべきなのでしょうか？」

自然とその問いが口から出た。

「私にはどう答える事も出来ないよ。何故なら、私が言った言葉で現状が動いたとして、それは君の為にも、友達の為にも、私の為にもならないからだ。　しかし、君がそんな疑問を私にぶつけてくれた事は嬉しく思うよ。なんせ、四年間で始めての事だからね。四年掛かって患者一人治せないのでは、ただでさえ肩身の狭い精神医の肩身がさらに狭くなってしまふところだったからね」

新城医師が引き出しからお菓子を出して僕に勧めた。新城医師の私物であるらしいそれは、細長く切られた羊羹だった。

「私は何故だか羊羹を細長く切らないと落ち着かない性質でね」

はあ。と曖昧に頷きながら羊羹を一切れ、口に入れた。

甘い。

それしか思い浮かばなかった。

「君のしたいようにすればいいさ。多少、犯罪臭はするものの、確定ではない。君もそろそろ過去に決着をつけてもいい頃ではないかな。確か五月の第三週が四回忌だろうか？」

今日は五月の第二週の土曜日だ。今日は学校公開で本来休みの日に授業をしたから、振り替え休日は第四週の月曜日。この辺りの高校はその日に休日を合わせていた筈だ。合わせてあっても、僕は遊びに行くほど仲の良い友達はいないけれど。

新城医師が茶碗にお茶を注ぎながら言う。辺りに香ばしい番茶の香りが立ち込めた。

羊羹をフォークで縦に刺して食べ、合間にお茶を飲んでから僕は言った。

「姫宮は中学二年生の時に変わったんです」

「それはさつきも言っていたね。簡単に、だったけど。三角関係だったかな」

「はい。ある男の子が好きな女の子がいて、ある女の子は姫宮の友達で、ある男の子は姫宮が好きだった。それだけの、少女漫画で大安売りされていそうな、ありふれたと言っては何ですが、そんな関係だったんです。結果は破局でしたけど、普通の人なら折り合いをつけて生きていけるじゃないですか。そのうち、なんとも感じなくなるじゃないですか。でも、姫宮は違ったみたいなんですよね」

「君に似ているね」

慈しみを含んだ憐れみの目だった。こう言った視線には慣れてしまっているが、それでも新城医師の視線は格別だ。いつでも、何度向けられても、心に響いてくる。思わず溢れそうになる涙を気合いで押しとどめ、新城医師の言葉を引き継ぎ話していく。

「そう、ですかね。それで彼女は何日間か学校を無断欠席して学校に来た時、髪を黒に染めて、黒のカラーコンタクトをはめて学校に来たんですよ。何があったか知りませんが、母親の面影を消したいようにも感じました。それで、いつも通りある子が気軽に名前を呼んだら、その子、首を絞められたんですよ」

「豹変」

「そうですね。正に、豹変です」

表と裏がひっくり返って変わるように、ガラリと変わる。まるで別物のように、変わり果てる。

唐突に新城医師が顔を上げ、今思い出したとばかりに僕に質問をしてきた。

「その女の子の名前、姫宮だったかな？」

「そうですね」

あまり聞かない苗字だ、と思いつながら頷く。視界の端に、ひび割れ

たタイトルが映った。

「もしかして、その子の両親離婚してる？ 離婚して、お父さんは再婚して、ついこの間亡くなったりしていない」

最初は疑問、最後は確信の響きを持った声だった。

「してまずけど……」

「そっか。そっかそっか……」

そう言っつて新城医師は頷いて、何処か遠い目をした彼に見送られて僕は部屋を出た。

彼女

7

病院からの帰り道、僕は落ち込んでいた。

どうして、長い付き合いとはいえ、赤の他人に自分の気持ちを話したのか、そして姫宮の過去を話してしまったのか。

延々とそれを考え、悶々と自責しているうちに、自宅に着いてしまった。

扉の前に誰かがいる。

キラリと光る白に近い金の髪、腰まで伸びた髪の間からこちらを見つめる瞳は翡翠色。顔は神の理不尽のように整い、伸びる手足は陶器の人形のようにスラリと長い。

姫宮？

何をしているんだ、こいつは？

失踪中じゃないのか？

様々な疑問を頭に浮かべた僕が、最初に口にした言葉は

「家、寄ってく？」

そんな言葉だった。

「……是非に」

その言葉に姫宮は、ひまわりのような笑顔で頷いた。

姫宮を伴い家に入り、リビングに入る。適当に椅子に腰掛けている姫宮の前にお菓子を置き、飲み物を取りにキッチンに行く。冷蔵庫の中には、牛乳と食材しか入っていなかった。仕方なく僕は野菜室から果物を何種類か取り出すと、ミキサーを出し、果物ジュースを作る事にした。

「手紙、読んだ？」

オレンジの皮を？き、丁寧に実を取り出していると姫宮がその声を掛けてきた。

「読んだよ」

続いて林檎の皮を？く。？いた後細かく切ったそれもミキサーの中へ。

「どう思っただの？」

「別に」

嘘偽りのない言葉だったが、姫宮が悲しそうに俯いたのがキッチンからも見えた。

何種類か果物を入れ、最後に牛乳と砂糖を入れてミキサーを回す。耳に残る音が鳴り、果物が粉々になったあたりでミキサーを止め、グラス製のビールジョッキにそれを注いだ。姫宮の前にビールジョッキを置いて、僕は対面の椅子に座った。食卓を挟んで向かい合う僕と姫宮。

「窓ガラス割ったのはごめんね」

「……言葉、普通に直したの？」

姫宮の謝罪には応えずに、こちらからの疑問を口にした。僕も姫宮も、飲み物はおろかお菓子にも手をつけない。

「アレは少しでも投げ込んだものに興味を持ってもらえるようにと思っただけのことだから」

「そう」

「それと、手紙は窓ガラスを割ってから投げ入れたの」

「へえ」

「この家は何も変わってないね。ずっと前に来て以来、なんにも」
「そうでもないよ」

姫宮がグルリと部屋を見渡す。瞳に浮かんでいる色は嫉妬？

「だって、寸分違わず前と一緒にじゃない。家具の位置もお皿の仕舞い方も。割れた皿とかもあったんでしょ？ わざわざ同じ物を買ってきたの？」

「偶然だよ」

「……ねエ、どうしてそんなに冷たいの？」

姫宮の声が氷点下をわったように冷たく響く。

「別に」

意識しているわけではないが淡々とした声が出る。その声に姫宮はピクリと反応し、冷たさはそのままに荒れ狂った。

「無気力が病気なんて嘘でしょ？ 私の事が嫌いだから何も反応を返してくれないんでしょ？ そうなんでしょ？ なんとか言っつてよ！？」

「嫌いだつたら、そもそも家に入れてない」

この一言で荒ぶっていた姫宮が大人しくなった。僕が作ったフルーツジュースに口をつける。それを見て僕も自分のジヨッキに口をつけた。青い果物の味、それらが混ざって、人口の砂糖で整えられた味。どこか自然と違う、不自然な味。

ゴトリとグラスを置いて、僕は今までの全ての疑問を乗せて質問をする。

否、これは詰問だ。

「姫宮は何がしたいの？」

乾いた唇を舐める。ざらついた塩の味がした。

「姫宮……」

僕の言葉にピクンと頭を上げた姫宮が「灰香って呼んで欲しい。昔みたいに」と言った。どうやら僕の詰問はスルーされたらしい。仕方無しに、言われた通りに呼び変えてからもう一度同じ台詞を言う。「……灰香は何がしたいの？」

「何がって何が？」

キョトンとした顔をする灰香を見ながら、僕はお菓子に手を伸ばした。灰香はそれを目で追っただけだ。灰香と呼んでも何も無いことに驚く。

この顔は嘘だ……。

そう思いながらも、思うだけでは何も変わらないからワードを増やしていく。

「窓ガラス割ったり、手紙を届けたり、僕の家に来たり」

「友達の家に来る事はオカシイこと？」

「オカシクはないよ」

「そつかそつか。えへへ……」

灰香がふにやりと笑った。それが気配として僕に伝わってくる。

「義母さんを殺そうと思うの」

唐突に、突然に、やんわりとしていた灰香の眼が真剣味を帯びた。

「……へえ」

クッキーを食べながら相槌を打つ。

声は平淡だったが、心境は変化していた。若干の驚きと、事態が動くということについての多量の緊張がグルグルと心中を巡る。

「止めないの？」

自分がやると言ったのに、止めて欲しいような口調で灰香が言う。

「それは灰香の自由だから」

「止めてくれないの？」

クッキーを食べていると、先ほどよりも切実な嘆願が僕に届いた。

「……人を殺すなんていけないよ。止めるー」

棒読みが過ぎたかもしれない……。灰香の目が険しくなっている。

「僕は灰香に人を殺してなんて欲しくないよ、絶対」

「そつかあ。えへへ」

今度の台詞には満足したのか笑み崩れる灰香。
疲れる。

灰香と話すと、とにかく疲れる。

だけど、なんとなく心地よい疲れだった。

「明つてさ」灰香が僕の名前を呼び捨てにする。「家族の事振り切れてないでしょ？」

「……どういう意味？ 皮肉？」

口角を笑みの時より五ミリほど多く吊り上げながら問い返した。

「羨ましい」

「……羨ましい？」

その言葉にビクリと僕が反応する。それを目で見て確かめた灰香が言葉を紡いでゆく。その様子を見て僕の胸はざわつき、胃がムカムカとし、灰香に敵意が湧く。

「だって明は、家族がいなくても思い出があるでしょ。家があるでしょ、遺品があるでしょ、残されたモノがあるでしょ。」

「……………」
灰香が椅子から立ち上がり、半歩程後ろに下がりながら言う。

「私にはもう、何にも無い。ううん、無くなっていくの。家は義母の物みたいな状態だし、記憶は曖昧になるし、遺品は捨てられたし」

「……………」
灰香はコチラを見ている。僕も黙って見つめる。穏やかではない視線の交差。灰香は羨望の眼差しで、僕は敵対を露わにした眼差しで、互いに互いを見つめる。

「だから明は、私が欲しいもの全部持つてる」
「持つてないよ」

その言葉は、たった一言だったけど。

岩から水が染みだすように

辛さの中から滲み出したような言葉だった。

『僕は』『本当に』『何にも』『持つていないんだ』

灰香と同じように、全てを失って。

手の届かない場所に全て逝ってしまったんだから。

遺品だってあるだけじゃないか。あつたからって何が変わるわけでもない。辛さをより身近に感じるだけだ。

「嘘」

灰香が言った『嘘』が胸に突き刺さる。僕のをまったく信じていない言葉に、我を忘れて叫ぶ。

「嘘じゃねえ」

灰香を睨みつける。視線に力があるなら灰香を殺せる強さで射抜く。「何も、僕のこと何も知らないで、知った風な口聞いて、何がしてえんだよ！」

「だって、だってだって持つてるじゃない！」

僕の気迫に一瞬気圧された灰香が、あらん限りの気概を振り絞って僕と渡り合おうとする。

「持ってねえつつてんだろ!!」

僕は大きく手を回して、家を指す。その間も決して灰香から目を離さず睨み続ける。

「この家の名義は僕の叔父だ！ わかるか？ わかるよな！」

憤怒と呼べるほどのソレを必死に内に留めている間に、気付けば僕は立ち上がっており、その時の衝撃で倒れたグラスからフルーツジュースが流れていく。二人分のフルーツジュースがテーブルにぶちまけられ、テーブルの下へと滝のように流れ落ちていく。

「……え？」

灰香の思考が一瞬止まった。空気が凍りつく。その冷たさで脳内に溜まっていた熱が消え去った。だけど、今更止まらない。

「……僕が何で薬を飲まなきゃ寝られないかわかるか？ 悪夢を見るからだよ、必ず家族が死んでいく夢を見るんだ！」

僕は四年前からその夢しか見られない。

僕の中の時計はそこで止まってしまった。

父がいた、母がいた、妹がいた。僕が行かなかったドライブの最中に皆死んだ。雨で滑って、崖の下に落ちて死んだ。人としての造形を留めていない家族。頭の無い父、半身が潰れた母、目玉が飛び出した妹。病院の霊安室で見た家族の最後の姿。薬剤では隠し切れない腐乱臭が脳に焼付いた。肉があんなに腐りやすいと知ったのはこの時だった。

いつだって僕は、その時のことを忘れたことなんてない。

家族の部屋に入ると自然と吐き気が込み上げる。どうしても、最悪の時を思い出す。

楽しかった思い出は薄れるのに、他愛のない日々は消えるのに、最悪の瞬間だけは無くなってくれない。

だからこそその悪夢。

「父さんが死んで、父さんの兄と言う人が僕の所に来た。あの人は、アイツは！ 僕の面倒を見ると言って、その為に必要だと言って、僕にサインをさせた、両親の財産全てを後見人に預けるサインを、

無理矢理させたんだ！」

家族がいなくなつて放心状態だった僕は、初めて会つた優しい叔父に心を許した。下卑た笑みだと気付かぬままに書類にサインをした。全ての失敗の始まりだった。

「……でも、無理矢理なら法律で何とかなるんじゃないの？」

灰香の言葉を鼻で笑い飛ばす。荒ぶる感情が、堰を切つたように溢れ出す。

「ならない！ 誓約書があるんだよ、『満十八歳まで遺産を管理運用する』わかるかい？ 彼は運用が出来るんだよ。預かっているといい続ける限り、詐欺は詐欺にならない。だつてお金を返すんだから。それは詐欺じゃない。僕が十八になる頃には全部使い終わられた後だッ！」

「嘘！ だつて明、住んでるじゃない、この家にいるじゃない！」
「毎月毎月家を出るように脅されてるよ、僕は！ 生活費だつて自分で稼いでる。学費は体面を気にしてアイツが払ってるけど、だから、僕は、僕は……！」

もう何が言いたいのか自分でもわからない。ただ自分の内から迸る何かに任せて叫ぶ。

「助けて欲しかったよ、僕だつて……！」

それは、言えなかつた言葉。

二年かかつてようやく言えた、救いを求める言葉。

遅すぎた言葉。

遅すぎた想い。

それに鋭敏に反応した灰香が半狂乱になる。

「傍にいたじゃない、私、私ッ」

「傍にいたから、遠ざけるしかなかったんじゃないか！ 巻き込むわけにはいかなかったんだ、姫宮まで、灰香まで巻き込むわけにはいかなかったんだ よ！」

足元がぐらついてたたらを踏んだ。靴下が冷たいと思つたら床はとつくにフルーツジュースまみれで、その真ん中に足を入れている僕

がよるめいた事で新たな波紋が広がっているところだった。

「何で！？ どうして！？ どうしてあの時私を頼ってくれないでいて、どうしてそれを今話すの！？」

「灰香の目があの頃の僕にそっくりだから、一人で全て片付ける気なんだから？ でも、心の何処かで踏ん切りがつかなくて、力が足りないかとも怖くて、でも今を何とかしたいと思ってる目だ」だから「僕に止めて欲しいがったのはそういうわけなんだから？」

一瞬目を見開いた灰香が

「止めて欲しいわよ、助けて欲しいわよ」

灰香が叫ぶ。だってだってと咽びながら叫ぶ。ありったけの力で、吼える。

「だって辛いじゃない、辛いじゃない、殴られて蹴られて刺されて連れ子の世話の為に学校に行けなくて、こんな事の為に生まれたわけじゃないって思うじゃない！」

「だからわからないんだよ、灰香が僕に何をしたいのかわからない！ だって、僕には君を救う力はないんだよ。君を止めたら君は嫌な世界から抜けられないままでしょ、じゃあ僕にどうしろってのさ！？」

「私にもわからないわよ！」

そう言つて、喉を押さえて何度かこほこほと咳き込んだ灰香は、椅子にへたり込んだ。唇を噛み締め目に涙を溜め、それでも泣かない。意地だけで涙を抑えるその姿は 哀れだった。

ポケットから錠剤ケースを出し、ケースから青色の鎮静効果がある錠剤を一錠取り出し灰香の前に置いた。

「飲めば、落ち着くよ」

そう言つてそつと部屋を出た。部屋を出てすぐに僕はずると座り込んだ。

何をしているんだ、僕は。

今まで隠してきたのに、全部話しちゃって。

何がしたいんだ、僕は。

本当はわかっている。灰香の事は助けたい。

でも、関わる勇気がないのだ。

どうしても彼女の人生に関わる勇気が出てこない。

あと一歩で飛び出せるのに。そうしたら、彼女の為に死に物狂いになれるのに。

進行と後退の合図が頭に鳴り響き続けている。警笛に似た合図と灰香の微かな嗚咽が僕の家染みていつて、なんとも言えず切なくなつた。こんな気持ちだけは正確にわかってしまう。

錠剤ケースの中身を、全て口に入れる。そのままゴリゴリと噛み砕いて飲み込む。精神高揚剤も、安定剤も、睡眠薬も、どうでもいい。今のグチャグチャな気持ちを忘れさせてくれるなら。

多量の薬のせめぎ合いにやがて睡眠薬が勝ち、その凶悪な睡魔によって僕は昏倒するように眠りに落ちた。それが逃げたとわかっていても、臆病な僕は微睡む。

起きたのは偶然だった。偶然、誰かが傍を通った気がして、起きた。リビングに行ってみると既に灰香はおらず、机の上の錠剤がなくなっているのを見ると薬は飲んだらしい。机の上に書置きが一枚、裏返して置いてあった。フラフラとリビングを進み、朝ごはんを作ろうと引き出しを開けると、あるべき物が無かった。

全部で五本あるうちの包丁が二本なかった。万能包丁が一本と、生前の母の趣味で買われた鋼で作られた包丁。刃物が二本、うち一本は凶悪なまでに斬れる包丁。それらが無かった。

背筋がゾワリとした。肌が泡立つ。

冷蔵庫に貼り付けてあるカレンダーを見ると、今日は日曜日。

『普段はカーテン閉まってるんだけど、日曜日だけは換気の為か開いてるんだよ』

義母がいるんじゃないか？ だから、換気をしているんじゃないか？ 灰香は薬を飲んで何を考えた？ 無気力で何を想った？ 冷たい血液が流れる感覚の中で何を空想した？ 慌ててテーブルに戻り書置きを捲ると、

『これは戦争』

ただ一言、それだけが赤いペンで書いてあった。乾ききっていないインクで書かれた乱れた文字。

ガシャン！

何か割れたような硬くて高い音が、隣の家から響いてきた。

戦争と恋愛においては、全ての手段が許されると言う誰かの格言が唐突に思い浮かぶ。

「灰香ッ！」

叫んで、何をすれば良いのかも考えられず、衝動のままに体が動く。リビングから飛び出す靴も履かずに走り出し

灰香の家の窓ガラスが割れているのを確認して

気が付いたら家の中にいた

足跡を泥と共に残しながら物音の方向 二階へ向かい

開けっ放しの扉

へと飛び込む

扉の中は灰香の義母の部屋らしい。モノトーンを基調とした落ち着いた雰囲気の一部屋。その中心で義母がこちらを、灰香を見て硬直している。灰香の手が上に振り上げられ、へたり込んでいる義母に振り下ろされる

「灰香ア！」

灰香を後ろから抱きすくめる。風を切り裂いて振り下ろされていた包丁の切っ先が、義母からそれて宙を舞う。

「離してッ！」

暴れる灰香を抑えようとするが、睡眠薬の残滓が残る体では抑えきれない。灰香に力負けして横に倒される。灰香もぐらついて包丁の狙いが定まっていない。

僕と灰香が体勢を整えたのはほぼ同時だった。寸瞬速かった僕が義母の前に滑り込み、それに気付きながらも灰香は包丁を止められない。

灰香の包丁が僕の脇をざっくりと切る。皮を斬り肉を絶ち骨に衝撃を与えた包丁が、僕の肉を引き千切りながら灰香の手に戻っていく。灼熱の痛みを堪え切れず床に転がる僕。脇から流れ出す血が、茶色のカーペットを赤く染め直していく。そして僕を刺した包丁が灰香の手から滑り落ち、僕の腹に突き立つ。予期せぬ衝撃 否、斬撃に声を漏らす事も出来ずにのたうつ。胃袋が裂けた様な痛みに気絶

しかける。

「ごめんなさい　ッ」

僕が痛みを必死に堪えようとしている間に、灰香の握った包丁の切っ先が彼女の喉へと向く。

その瞬間だけ

わき腹の痛みも、腹の痛みも、本当に全てが消えた。

跳び上がり、灰香の喉へ向かう包丁を掴む。柄を取ろうとして行き過ぎ、刃の部分を思いつき握りこんでしまう。

血飛沫が床に落ちて。千切れた皮が、肉が、血飛沫を追って床に落ちていく。

「痛アアアアあああ！！」

刃が僕の血で滑る。

肉を切り飛ばし骨を削り神経を圧迫しながら、それでも包丁が灰香の喉へと向かう。

さらに力を込めて握る。

出血量が目に見えて増え、痛みが頭を引っ掻き回して何も考えられなくなる。

違う。痛みに埋め尽くされる。脳内が痛み支配される。脂汗が吹き出す。

叫ぶ。

叫んで、叫んで、叫んで　目の前が真っ白になった。

喉がひりついて現実に意識が戻ると包丁はちゃんと僕の手の中にあつて、床に滴る血は僕だけの物だった。灰香の首先一寸で包丁は止まっていた。

「……ゴボツ……」

口から血の塊を吐き出す。鉄臭さと生臭さ、酸っぱい臭いが口内に立ち込めた。胃袋に穴が開いてしまったようだ。脂汗がだらだら垂れて体中を湿らせていく。

眼前で止まる包丁を見て、灰香がポツリと漏らした。

「助ける力がないって言ったじゃない……！ どうして邪魔するの？」

痛すぎて吐きそうだ。僕はゆっくりと膝から床に落ちた。

口から腹から血が零れていく。命が失われていくのを細部に至るまで感知する。

呼気が荒ぶる。

目尻に涙がたまる。

体が自然に震えだす。

それでも、伝えたい言葉があった。

だから口を開いた。

「……知らない人間が、笑っていようが……泣いていようが……興味ないけど……灰香には幸せになつて欲しいから……。だから、人殺しなんてして欲しく……。ゴボ……。ないし、死んで欲しくも無い……」

胃液と痰と血がないまぜになった物を吐き出す。

左手で刃を握り右手がそれを押し込んだ形になっている。手首の近くから全ての指の先までを抉った包丁を気合で外す。鼓動と共に血液が流れ出る。動脈まで切れてしまっているかもしれない。熟れたトマトを叩き潰したような僕の手。

喉をせり上がってきた血を吐き出した後、盛大に咳き込む。血液を失った所為で貧血になりグラグラと視界が揺れる。

「ほつといてよ、これは、戦争なの。その女と私の、戦争なの。ほつといてよお、そんな痛い形で助けられないでよお、だって私もう居場所がないんだよ、世界の何処にもないんだよお」

灰香が僕の目の前にすとんと腰から落ちて、目じりに涙を溜めだす。堪え切れない涙が、今までに我慢して抑え込み続けた悲しみ的一端が、一筋零れる。

「僕が、友達だ。僕が、居場所だ。四年前と違って、今度は何をされても僕が灰香の傍にいる番だ」

にこり　と笑えたかどうかかわからない。きつと引き攣った笑みだ

つたろうけど、血にまみれた笑顔だったけど、その笑顔を見た途端に灰香は決壊した。滂沱の如く涙が溢れて、嗚咽が漏れて、嗚咽も涙も隠せず泣き始める。

感情がコントロールできない僕だけだ。

感情が時々わからなくなる僕だけだ。

ただ、目の前で泣きじゃくる女の子を助けたいと、本気で思ったんだ。

それだけが、今わかる本当の気持ち。

それこそが、自信を持てる決意。

戦争（後書き）

実はこの話……、包丁で主人公が刺されるシーンが書きたいが為に、
とつかそれしか考えずに書いたものなんだ……。

転換（前書き）

ちよつと長くなつたかも、ごめんなさい。

それから先の事は良く分からない。

ただ、朦朧とした意識の中で、誰かが救急車を呼んで僕はそれに乗せられた。それくらいが覚えてる事の全てだ。

目を開けると僕の目の前には真っ白な天井が広がっていた。鼻にツンとくる消毒液の臭いと硬いベッドの脇に置いてある点滴が、僕に此処が病院だと教えてくれる。

起き上がろうとして、腹部と脇の痛みで起き上がれず、左手をついて思わず叫んだ。怪我人だという事をすっかり忘れていた。右手をそろそろと動かして手のすぐ近くに置いてあったボタンを押す。ナースコールだと思う。多分。

暫くして、白衣を着た妙齢の看護婦さんと外科の先生が来て、僕の怪我の具合を話してくれた。左手の小指神経損傷、脇の筋肉の断裂、胃袋に二センチの穴……ホワイトボードを使ってたつぷりと話してくれた。

要約すると、左手は一月以上使えず小指を動かすにはリハビリが必要で、脇腹の完治は二週間後で暫くはひりつき、胃袋は治りはするが暫くは辛い物などは食べては駄目だそうだ。それに腹部には痕が残ってしまうらしい。

説明の後、僕に傷口の化膿や壊死を防ぐ為の薬を十種類程渡してから、看護婦さんと医師は帰っていった。

ポツンと一人残された僕はシャツを捲り、手術痕を確認してみたり、窓の外を眺めたりしていた。

陽がやや赤みを増してきた頃、新城医師が僕の元を訪れた。

「調子はどうだい？」

「嫌味ですか？」

げんなりとした顔で返す。

気のせいかもしれないけど、以前よりも『感情』というものをコントロール……知覚できているのかもしれない。ゆつたりとした満足感が僕を包んだ。

「元氣そうでなによりだ。一人部屋の使い心地はどうだい？」

新城医師は僕のどこを見て「元氣」と判断したんだろうか。本当に嫌味なのだろうか。

「入院したのはこれが初めてなので、使い心地とかよくわかりません。それと、どうして一人部屋なんですか？」

「ふむ。説明の前に座ってもいいかい？」

どうぞ、と返すと新城医師は手近にあつた背もたれの無い椅子を引き寄せて座った。

「君、自分が精神科に通院してる事を忘れて無いかい？ 他の入院患者の邪魔にならないよう配慮されて一人部屋なんだよ。料金は同じだから安心しなさい」

「あまり嬉しくない配慮ですね」

「嬉しくないと感じるのかい？ それは本心からかい？」

何かをさぐるような目になって新城医師が僕に問い掛けた。

「……どう、なんででしょうね。一般論からああ言つた気もしますし、本心からだつた気もします」

たどたどしく僕が説明をする。そのことに新城医師は満足そうな顔をし、言った。

「ま、脳は電気信号の伝達で感情を決める訳だからさ、感情感情、心心って一生懸命になる必要はないと思うんだよ。したいように生きて、したいように話して、したいように行動すればいいさ。今回は行動出来たのかい？」

「一生懸命やりましたし、心から生きていて欲しいとも思いました」
「……またタイプな。ああそうそう、警察が君に事情聴取をしたがつてたよ。重症人つて事で面会謝絶状態だったけど、意識が戻ったから明日辺りに来るかもね。ここから先は独り言なんだが、事件が起こつたかどうかわからない時、一人からの証言しか得られず、

物的証拠が不十分な場合、事件は不起訴となるよ。ちなみにこの場合、警察に被害届を出す事が可能なのは君ね」

「……？」

コクンと首を傾げる。何を言っているんだろう。

「それじゃあまた。体と心をお大事に」

新城医師が部屋を出て行った。

次の日、午前九時。

若い刑事と眼光鋭い二人の刑事が、僕の所に来た。

彼らは今の僕が置かれた状況を端的に説明していった。

姫宮家からの電話で救急車が来たこと。それによって僕が病院に運ばれたこと。姫宮蓮華　灰香の義母　からの証言により、姫宮灰香に対して事情聴取を行っていること。姫宮蓮華からの証言と、現場の物品及びに状況証拠から逮捕の申請ができること。

ただし、示談などの形に収めることも可能なこと。

それらを分かり易く、端的に、事務的に彼らは伝えていった。答えは明日でいいと言われたが、僕はその場で「示談でお願いします」と答え、刑事たちはそれぞれ名刺を僕に渡すと病室から足早に出て行った。それはまるで、この事件が早々に解決する事を願っているような態度で、そして恐らくはそうなのだろう。

警察は必要以上に踏み込まない。

怪しきは罰せずの原則の下、粛々と業務をこなすように、事件を解決していくだけだ。

正義は間違つてはならないからだ。

そして何より、私情が挟まれるような事件を嫌うからだ。彼らの目に今回の事件は、痴情のもつれによる事件としてしか映っていないはずだ。

状況証拠が、義母からの証言、灰香の指紋がついた包丁、その包丁は刺された本人の物。証言は包丁を向けられた事による錯乱と判断されて、何より僕の示談がそれらを裏打ちしたのだろう。

刑事達がいなくなつてから数分と経たないうちに、新城医師がやつてきてこんな事を言い始めた。

「君は植物状態に陥つた人間が、植物人間になつてから一年以内と死ぬまで、どちらの方が多く植物状態から回復したかわかるかい？」
「一年以内」

選んだ理由は特に無い。強いて言えば天邪鬼だから。

「正解。さて、この結果を見てわかるように、人間の脳、脳に限らず体はある一定の状態。怪我でありなんであり、それがあまりに長く続くと次第に治らなくなつてしまふわけだ。つまり……君、こういうのズバツと言つて大丈夫なタイプだっけ？」

「大丈夫です」

「君はもう治らないのかもしれない。ああ、説明が足りなかつたね。君は思考する事が出来る、しかし、感情というモノがよくわからない状態になっている。ここまではいいかい。そこで私は一つ仮定を立てる。君のメンタル面は今、幼子と同じ状態なのではないか、と」「つまり、感情をどう表現したらいいかわからないほどの、子供つて事ですか」

感情がコントロールできていなかつたのではない。
感情がわからなかつたのだ。

その気持ちは何なのか、またどういう行動を取れば良いのかが。無気力症と情緒不安定を今までは一緒の病気として考えていたが、新城医師はそれを裏返し、別の病気として処理したのだ。

「そつだ。ただ、悲観的になる必要はそんなにない。赤子がどうやって感情を表すか、自分を作るかと言えば、話し相手や外的環境に合わせていくことで形勢されるからだ。最悪、もう一度その過程を踏めばいいだけの話だ」

「気の遠くなりそつな話ですね」

「そつでもない。一度作つた線路が砂で埋まつた。それを掘り返すだけだからね」

あくまで仮定の話だよ、と言って病室から出て行くこととする新城医師に僕は「待って下さい」と反射的に呼びかけていた。待って下さい……何を、何を言う気なんだ僕は。

「もし仮に友達が虐待を受けていたとして、それが原因で犯罪に走り掛け、警察に尋問され、何もなく釈放されたとして」

仮定ばかりの話。その話を新城医師は、振り向きかけた状態のまま僕を見ている。

「して？」

「僕は……どうすればその人を助けられますか？」

何を口走っているんだ僕は　！

これはまるで、今の灰香の状況を端的に説明しただけじゃないか。

「……あえてそれが誰かは聞かないけど、まあ、そうだね。虐待を受けたからといって力で反発すれば多分、幸福な終わり方は訪れないと思うよ。殺しても無理矢理押さえつけても何処か空虚感が漂うだけでね」

「だから、解決策を聞いてるんです。僕は」

苛立ったような声が出て、それに自分自身で驚き「すみません」と反射的に謝る。

「いやいや。謝る必要はないよ。そうだね、解決策か。虐待をしていた人と受けていた人、そのどちらもが一定の形で妥協してお互いを認めない限り、終わらないよね。方法はたくさんあるだろうけど、詳しく知らない私にはコレだと言う解決策は示せないかな。ごめんね」

いえ、と僕が労いを込めて頷くと。

「独り言なんだけれどもね」

そう前置きをしてから新城医師が語りだす。遠い、今からでは追いつけない場所を見ている様な目。過去を見透かした瞳だ。

「高校時代の友達に姫宮というやつがいてね。そいつ、私が独り身なのを知っていながら同窓会で必ず、グラマーな金髪美女の嫁自慢をしてくるんだよ。そいつの娘は確か、灰ほのかに香ると書いて、灰香と

読ませたはずだ」

「それって……」

新城医師の目はやはり僕を見てはいなかった。今は亡き灰香の父を見ているのだ。

僕の言葉を遮って新城医師は話し続ける。

「これは独り言だよ。それでね、そいつが酔った時に漏らした言葉があった。『宗教の溝ってやつは深いなあ。どんなに愛して、心を通わせてもな、神様の領域には指一本入れさせてくれねえんだ』彼の奥さんは、その、否定するつもりはないが、神様を盲目的に信仰していたらしいね。そしてある時、電話口で彼は言ったよ。『アイツには悪いが、娘にまで俺は宗教をさせたくねえよ。実の娘の身体傷つけて、喜ぶなんてできねえ』そう言っただけ、離婚する。そう言っただ」

灰香の手紙の一説が蘇る。

『ママとパパ、信じているモノ違った。』

母は娘の為に、父は娘の為に。互いに信じて、そして決別した。

「姫宮という名前を聞いて、ふと思いついただけだよ。別にコレを聞いたからといって、どうして欲しいというわけではないが……出来れば助けてあげて欲しい。昔馴染みの友人が、安心して天国にいられるようにね」

長い独り言を言い終えた新城医師は、僕の答えを聞かずに病室を出て行った。去り際に聞こえた「頼んだよ」という言葉は、僕の幻聴だったのか、真の言葉だったのか。

ナースコールで看護婦さん呼び、車椅子を出して貰い、携帯をかけてもいい場所を聞くと、屋上ならいいと言われたので、看護婦さんに連れて行って貰った。電話が終わるまで待っていますと看護婦さんが言ったので、僕は屋上の錆びた床に座り込んで電話をかけた。干されたシャツに夕日が照り、真っ白な看護婦さん達がそれを取り込んでいくのと合わせて見ると、酷く浮世離れした光景に思えた。

「もしもし、ユート？」

「他の人間だと思ったか？ 悪い、姫宮さん見つからねえ」

ワンコールで電話に出たユートはどつやら、繁華街にいるらしかった。ゲーセンの電子音と呼び込みの音が津波のようにマイクから響いてくる。

「灰香ならもう見つかったよ。あ、今は警察に捕まってるけど」

「……うん？ 話がまったく見えないというか、じゃあなにか。俺がこう、町を探し回っていたり、友達に頼んで目撃情報を集めていたのは無駄って事か？」

「それよりさ、ユート灰香の母親の勤め先ってわかる？」

「俺の話はスルーかい。いや、わかんねえけど、必要なら探すぞ」

「お願い。それと、見つかったら作戦があるから僕の所まで来て。」

白代総合病院の三階の個人部屋にいるから

「一つだけ言っついていいか。俺が知らない間に何があって、何がどうなってるの！？」

クスクス。

僕の笑い声が携帯を通してユートに届く。

少しだけ心が軽くなった。

僕と彼女

10

電話をかけた次の日、ユートは菓子折りを手に病室に来了。桜の絵が描いてある包装紙の中には饅頭が入っていた。

「それで、何の用だ？」

自分で買ってきた饅頭の包装を自分で解き、饅頭を一つ口に放り込みながらユートが言った。

「手伝ってほしい事があるんだけど」

「いいよ」

迷いの一切見られない即答。僕が『何で？』と聞く前に、「姫宮さんのことだろ」と彼が付け加えた。完全に読まれていたらしい。ぐうの音も出ないとはこのことだ。

「元々俺が焚き付けたんだし協力するよ。とりあえず、姫宮さんの義母は駅前の出版社に勤めてるぞ」

ユートが二つ目の饅頭に手を伸ばす。僕も箱の中から一つを取り出して食べる。

甘い。だけでなく、確かに美味しいと感じた。その事に微かな感動を覚え、僕はもう一つ饅頭を食べる。口の中で薄い皮が破け、こしあんの甘みが口内に広がった。胃袋に饅頭が落ちると同時に鋭い痛みも走ったが、何故だかそれさえも心地よい。

「灰香と話をさせたいんだ。力ではなくて言葉で決着をつけてほしくて」

「それで働いている場所の情報が必要だったわけか」

ユートの頭の良さは健在だった。話をさせたい、そんなキーワードだけで全てが理解できるなんて。

「一応確認するけどよ。姫宮さんの義母は日曜くらいしか家にいないくて、今までの経緯から考えて話し合いをする気はないんだろ。だから話し合いをする場を無理やり作る。こういう解釈でいいか？」

僕が頷くとユートが最後の饅頭を食べた。一口サイズのそれは十個全部、僕とユートの胃袋に消えた。……というかコイツは何でお見舞いに饅頭を持ってきて、見舞われた人には二つしか渡さずに自分は八個食べてるんだ？

そんな疑問も頭の片隅にあったが、それ以外の大部分は灰香のことを考えていた。

もし、義母が話し合いに応じたとして、義母と灰香の二人きりだけにするのはマズイ。僕らが入っていい事柄ではないが、せめて場所くらいは姫宮に有利にしくはならない。相手は出版社に勤めているくらいだから弁は立つだろう。

ただ、この案には二つ問題がある。一つはどうやって話し合いの場を作るか。そして、どうやって灰香を話し合いで勝たせるか。

「それで、どうしたら義母が話し合いに応じさせるかなんだけど……」

一つ目の疑問からユートに問い掛ける。

仮に僕が精一杯「虐待」などの単語を出版社前で叫んだとして、警察に通報されたり警備に追い返されるだけで、実質的な効果はないと思う。警察や児童相談所に頼るのも一つの手だけど、それは彼女の戦いにならない。

『これは戦争』

赤いボールペンで書き殴られたこの言葉を字面通りに取るなら、まだ戦争は終わっていないのだ。灰香にとって義母との戦争はいわば停戦状態。僕という不確定要素が強引に加わってできてしまった結果。ただの停滞。何も前に進んでいないし、戻ってさえいないのだ。警察や児童相談所に頼ることは後でも出来る。

だけど、それで勝っても何も変わらない。

保護してもらえても、守り続けてもらえないわけじゃない。

いつか繰り返してしまうかもしれない。

だから、灰香は戦わなければならない。暴力に頼るのではなく、書式などを用いた様式で、言葉と言葉の戦争で勝たなければならない。

ぼんやりと窓の外を見ていたユートの口が動く。

「……人数が必要かな。お前って今、外出出来るのか？」

「出来ると思うよ。外出許可を先生に貰えれば」

「確認とって、出られるようだったら連絡してくれ。俺はちよっくら準備してくる」

饅頭を食べた所為で出たゴミを手早くまとめて箱の中に入れたユートは、箱を持って病室から出て行った。

ナースコールで看護婦さん呼び、外出に関して聞いてみたところ一週間後に抜糸をしたら退院だと言われた。抜糸をした後も経過を見るために通院はしなくてはならないそうだが、頻繁なものではないし、自宅療養はお金が掛からないので助かる。

屋上に出てからその旨を携帯電話でユートに伝えると。

『オツケー。ところで方法って俺に一任してくれんのか？』

とユートに尋ねられた。僕が考え付かなかったことを既に彼は思い付いているらしいし、灰香の事情の事もわかってるから大丈夫だろう。そう考えて僕は「任せる」と答えた。

『姫宮さんの名前は出さないで、出来るとこまで進めとくわ。一週間後退院だろ、迎えに行つてやるよ』
『そんな言葉を残して、通話が切れた。』

それから二日後、僕が看護師さんに借りたミステリー小説を読んでいると、灰香が病室にやって来た。少しやつれた灰香に、病院の一階にある売店で買ったスナック菓子を幾つか渡す。お礼を言つて食べ始めた灰香を尻目に、僕はミステリーを読み進める。
探偵が謎解きを終えた頃、スナック菓子を食べ終わった灰香が、僕に向かつて深々と頭を下げた。

「ごめんなさい。本当に、ごめんなさい」

心からの謝罪。顔を見なくても申し訳なさそうにしている灰香の顔が浮かんだ。

「……何が？」

灰香の謝罪の意図が分からなかった僕は、素直にそう返した。巻末まで読み進めた本を一度閉じて脇に置いた。

「怪我させちゃったり、巻きこんじゃったり、色々……」

ああ、と僕は頷く。四十センチ四方の白いテーブルに積み重ねられている駄菓子を取って食べる。

「気にしなくていいよ。僕が勝手に首を突っ込んだだけだから」

チヨコレート味のそれを咀嚼していると、灰香は僕の寝ているベッドに身を乗り出して、何か言おうとして口ごもり、何も言えずに固まった。

「……本当はもっと早くに来たかったけど、今朝方まで警察署にいたから、あの、」

場繋ぎ的に出た、やはり謝罪の言葉。歯切れの悪いその台詞を遮って僕が喋りだす。

「本当はさ」

噛み締めるように言う。

「僕がお礼を言いたかったんだ」

意味が分からない、という表情を浮かべる灰香。

どう説明したいい分からないけど、僕は脳の奥から言葉を搾り出して、精一杯の感謝を伝える。

「ありがとう」

結局はその一言にまとまってしまった。自分の語彙数の少なさに半ば呆れながらも、

「ありがとう」

この一言に今までの思いを乗せて、万感の想いを乗せて感謝する。

「家族が死んだ時、一緒にいてくれてありがとう」

その一言が言えた瞬間、突如として湧いてきた涙が僕の視界を奪った。開けたままの目から涙が流れ出す。拭っても拭っても、溢れ続ける。四年間貯め続けた涙が、零れだす。

「やっと僕は、諦められたよ」

僕は。

家族が死んだ事は知っていた。
家族が死んだ事は理解していた。
家族と会えない事も分かっていて。

だけど、

信じていた

それなのに、

願っていた

分かっていたのに、

解っていなかった

どうしてもだか家族が諦められなかった。

理由もなく、いつか会える気がしていた。

根拠もなく、どうにかなると思っていた。

灰香の事件に関わって僕はようやく、返ってこないと実感した。心の奥の奥の奥、理屈の通じない部分で納得できた。

四年かかって僕は、家族を諦められた。全てを諦めた。戻ってこないと認められた。

「どうしてだろ、涙が止まらないや。家族がいなくなってから、四年も経ってるのに。今頃涙が、涙が……」

自然と嗚咽が漏れだす。涙を拭くことさえもう出来ない。ただ黙って上を向いて、泣き続けるだけだ。白いシートに涙の跡が黒く残っていく。

そんな僕を灰香がそっと抱きしめた。

「大丈夫だから」

何の根拠もない言葉。だけど、何の根拠もないからこそ信頼できて。だから涙が溢れて出ていく。恥ずかしさも悲しさも、全てを忘れてそっと抱かれる。どこか安心するような甘い匂いを感じながら、心に溜まった膿を消し去っていく。

僕が泣き止んだ時、灰香は優しい音色の何かを歌っていた。

高い高音が頭を揺らす。英語の歌詞が心を洗っていく。

意味なんて分らなくても、救われる音色だった。

「この歌、どう聞こえた？」

耳元で囁かれた事に僕が答えるより速く、灰香が言葉を紡いでいく。

「私には戦えて聞いて聞こえたの。戦え、現状と戦えて」

僕にとつての救いの歌が、灰香にとつての戦いの歌。

その違いこそが両者の立ち位置の違い。

僕は終わってしまったことで、灰香はまだ戦える場所にいる。

「ママが教えてくれた歌なの。神様のことを謳った歌だって」

灰香は知っているのだろうか。彼女の両親がその事で離婚した事を。

いや、知っていて言っているんだろう。だって彼女の手紙には『信

じているものが違った』と書いてあったのだから。

だからコレは、彼女なりのケジメなのだ。

人に話すことでつけること事の出来る、ケジメであり決着。

「戦えてたかな、私？」

「戦えてたよ」

僕が邪魔しただけで。

そして

「まだ終わってない」

ユートを信じて待とう。

僕の退院まで残り五日。

「まだ終わってない……か」

そう呟いて灰香が僕から離れた。そして、「ごめんなさい」と。

「私もごめんなさい。窓ガラスを割って手紙を投げ込めば、明が私

を助けてくれると思ってた。こんな怪我もしないで、誰もが笑顔に

なれるような、そんな解決方法を見つけてくれるって 万能のア

ナタを、勝手に思い描いてた。アナタだけは私の理解者になってく

れて、絶対に味方だって、信じてた」

灰香は少しだけ苦くて、苦しくて、悲しそうな顔になって謝る。

「ごめんなさい。関係の無かったアナタを、無理やり巻き込んだの

は私。お礼を言われても、受け取れないの……」

「受け取ってくれなきゃ、駄目なんだよ」

切々と思いを込めて吐露する。

「灰香が受け取ってくれなきゃ、僕は終われないんだ」

悩む灰香に強く頷きかけると、灰香は暫く迷って、やがて頷いてくれた。

「面会時間、そろそろ終わるから行くね」

名残惜しそうな顔の灰香に僕は「家、どうしてるの？」と問い掛けた。

「ホテル暮らしたよ。一晚千円のカプセルホテル」

カプセルホテル……繁華街の外れにあったような気がする。そして、あまり治安が良い場所ではなかった筈だ。そう思った僕は床に置いてあった鞆から家の鍵を取り出した。

「家賃しておくよ。お金そんなに余裕ないでしょ？」

唐突に渡された鍵を半ば条件反射的に受け取ってしまった灰香が「でも……」と言いかける。

「一階の客間に布団余ってるから。ベッドがいいなら二階の僕の部屋を使って。シーツは隣の妹の部屋に予備があるから。冷蔵庫の中は食べちゃっていいよ。そのままだと痛むだけだし……あとは、何かあったかな？」

「だけど……悪いよ」

「なら、掃除だけしていてくれると嬉しいかな。掃除用具はキッチン下の流しの下に置いてあるから」

お礼だから、と言葉を繋ぐ。

「今までの、全部に対してのお礼だから。こんなことしか出来なくてごめん。……受け取ってくれなかったら、酷いよ？」

困ったような顔をしている灰香に、同じく困ったような顔をして小首を傾げてみせた。

「ありがと」

僕から受け取った鍵をきゅっと胸元に抱いた灰香の顔は、少しだけ赤かった気がした。病室が西側に位置しているから、西日が強いのだ。

やがて面会時間終了を告げに看護婦さんがやって来て、入れ違いに灰香は出て行った。

「…………アレ？」

灰香がいた位置に、西日当たってないや。顔が紅く見えたのは気のせいだったかな。

僕と彼女（後書き）

今思うと、なぜコレを送ったかわからなんだ……。読んで下さってる方には感謝してもし足りません！

暗躍

視点変更 立花儂人

黒澤明と姫宮灰香が病室で話した日が丁度終わる頃。

夜の闇と無関係。そう言い切っても問題ないほどの光量を誇る繁華街に俺はいた。カラオケの前を通り過ぎ、軒並み並ぶ飲み屋の一つに入る。立ち並ぶビルの隙間を縫うようにして残っている一軒家タイプの飲み屋。煤けて酒の臭いが染みついたのれんを押し上げて店内に入ると、赤ら顔で酔っ払う客を素通りして店員専用の部屋へと向かう。

そうして甚平に着替えると、客の前に立った。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

螺子工場やポスティングとは別に、常にいれているバイトがこの飲み屋でのバイトだった。時給は八百円程。午前零時から午前五時までが仕事の範囲。

愛想良く接客をしながら客をつぶさに見ていく。

高いブランド物の服を着ている男 珍しい。

赤ら顔で酔っ払うオッサン 見るからに金が無い。

焼酎をチビチビ舐めている赤髪の女 友達だ。

俺が赤髪の女が食べ終えた皿を取りに行くと、女から声が掛かった。

「……ねえ、うちの定食屋とこの居酒屋。どっちが料理美味しいかな？」

酔っていないときはすつきりとした顔立ちの女なのだが、唇の隙間から舌を出してチロチロと焼酎を舐める姿は猫のようで、ほろ酔いの今はしまらない顔になっていた。

「正直に答えて良いのか？」

「やっぱりいい。泣くかもしれないから」

はい、と女が紙切れを渡してきた。そこには名前と思しき文字の羅列が汚い字で書かれていた。

「私の方からはあんまり働きかけられないけど、まあ四十人は動かしてみよう。だからさ、今日は奢って？」

「最初に上限を決めようか。三千元までだ。というか奢ってもらうためにわざわざココに来たのか？」

「うん、そう」

「誰が奢るか」

女の前から刺身皿を取って厨房に持つてく。そして厨房で升酒を一つ作り、彼女の好みに合わせて味噌を盛りつけ持つていく。

「サンキュー、だから好きだよユートちゃん」

「お前に好きと言われると背筋が泡立つのは何でだろうな、朱音さんよ」

さあ、という声を聞き流して俺は仕事に戻った。

ともあれコレで最悪四十人は確保出来た訳だ。朱音に借りを作るのも怖いので、三千元くらいは奢っておこうとも思う。

ちなみにアイツは上限を決めなければ一人で五万は飲む。付いたあだ名は『蟒蛇』もしくは『バツカス』、性質が悪いのは吐くまで飲んで、吐いた後また飲むところだ。

午前五時十三分。

四畳一間の自宅に上がり、布団の脇に片づけてあったノートパソコンにスイッチを入れる。流しも風呂も無い部屋の中央で一人、パソコンの起動を待つ。

パソコンが起動し、すぐにお気に入りに登録されているページに飛んだ。ページは会員制のチャットページみたいなもので、俺が友達と作ったサイトだ。ID入力画面にパスワードを打ち込み、『誘蛾灯』という名前でチャットルームを立ち上げた。程なくして待ち人が入室を始める。

『麒麟』さんが入室しました

『メリリ』さんが入室しました

『赤竜』さんが入室しました

『ホームランバッド』さんが入室しました

『米粒』さんが入室しました

ユート：『……一人に絞ってから入れ』

麒麟：『いやいや』

赤竜：『僕とのチャットはこちらの方が』

ホームランバッド：『楽しいでしょ？』

ユート：『普通に話しづらいわ！』

メリリ：『わかったわよ……、べ、別にアンタの為に一人にするわけじゃないからね！』

ユート：『……他の誰の為なんだよ』

若干疲れてそう返すと、

『麒麟』さんが退室しました

『メリリ』さんが退室しました

『赤竜』さんが退室しました

『ホームランバッド』さんが退室しました

五人中四人が、正確には一人が動かしている五体のキャラクターの内四体が、チャットルームから出て行った。

そうして残った一体が話し出す。

米粒：『ユートには思いやりとか、余裕とか、そういったものが足りないと思うんだ（怒）』

ユート：『俺か？俺が悪いのか？させてるのはお前だろうが！』

『ホームランバッド』さんが入室しました

ホームランバッド：『ナイスバツテイイングー！』

ユート：『何が？何がナイス？何がバツテイイング？てか、バットじゃなくてバッドじゃねえか！まるつきり関係ねえだろ！』

『ホームランバッド』さんが退室しました

米粒：『まあさ、そんなカリカリしないでね？今のは僕なりの気遣い&ジョークね（笑）』

ユート：『悪ふざけしか感じられねえよ！消し粒にされてえのか、
デメエ……』

画面の向こうの誰かが笑ったような気がした。

米粒：『まあまあ。二台同時にパソコン打てるようになってテンションが高い僕を許してよ（笑）』

コート：『一台のパソコンで幾つも操作しているのか？』

米粒：『違うよ、パソコンが八台あるだけ。有線が一台に、あとは全部無線』

米粒：『あ、それで何？ わざわざこんな名前のチャット立ち上げて』

コート：『頼みたい事があるんだけどさ』

米粒：『無理っ』

コート：『殺すぞっ』

コート：『てかまじさあ、結構ガチで頼んでるんだよね』

コート：『友達の頼みなんだけどさー』

米粒：『聞くだけ聞きましょう』

米粒：『……僕が作ったこのページ、名前「誘蛾灯」にしようって言ったの却下したのは今だけ水に流してあげるからさ（哀）』

コート：『俺が悪いみたいなのりになってんだけど、明らかにあなたのネーミングセンスの無さが原因だからな！』

米粒：『僕の提案蹴っついてあんな名前つけちゃってさ……（恨）』

コート：『五日後』

米粒の意見を見無視して書き込み、間違いに気付いて書き込みを直す。

コート：『あ、いや四日後か。四日後に大量に人集められないか？』

米粒：『僕の話はスルー……。四日後？ なんでまた？ というか普通に書き込めばよくない？ ここは君の作った、一種の理想郷なんだからさ』

コート：『理想郷は出来上がってねえよ』

米粒：『しかしまた、何でこんなサイト作ろうと思ったのかねー？』

コート：『俺の話もスルーしてんじゃん！ いいじゃん！ 人の善性を試したくなったの！』

より正確には、悪性も。それらの比較をする為のサイトだ。

ユート：『話進まねえー』

ユート：『とにかく！ 集められるのかどうか！』

米粒：『まあ、二十人くらいは理由もわからずにノリで動きそうな
のいるけど』

米粒：『副アカ使えばもうちょい増えるけど』

ユート：『頼むわ』

米粒：『しっかしまあ、このページの趣旨で誰がIDを何個も作っ
ていると想像し得ようか。想像はしても、実行に移す人はいない気
がするよねー』

ユート：『眠い、落ちる、ノシ』

米粒：『何故に片言！ てか昼夜逆転生活の僕に付き合ってもうち
よいチャットしてよ！ リアルな人が恋しいの！』

ユート：『引きこもり止めればいいじゃん』

ユート：『あ、たださ、詳しい事は後でメールするけど、数日後俺
がサイトに現れたら俺の発言に同調してくれ。それから、四日後に
このページの会話ログ全部消しといて欲しい』

米粒：『なんで？ っていつてもまあ、君は答えてくれないんだろ
うし、きつと君は正しいんだろうし。わかった、やっておくよ』

ユート：『恩に切る』

米粒：『だからもう少しチャットしよ』

ページの右上についているログアウトボタンを押す。ついでシャッ
トダウンをクリックしてパソコンの電源を落とす。腕時計で時刻を
確認すると、どうやら十分程だったらしい。

後一時間程で帰ってくる母の為に布団を敷き、傍らの布団に寝そべ
った。

「おやすみ」

誰とも無しに呟く。ほう、と意味の無い溜息も一つ吐いた。

……四日後に出来レースをする用意は整った。友人の前で嘘をつか
なければいけないという心労はあるもの、偽物である俺にはこうす
る他に方法はない。

ただ、人を助ける為に動いている事。
その事に一先ずの安堵を覚え、たゆたう様な睡魔に飲まれる。

暗躍（後書き）

一字一句直さないで投稿縛り……すごい、むず痒いよコレ!?!?

ハシバミの樹

11

退院の日。

僕が退院の手続きをしている時にユートが来た。いつも通り黒を基調としたファッションの彼は、病院の白の中では浮いて見えた。言葉が悪いが、病原菌のようだ。ユートに向かってあからさまに嫌そうな目を向けている人もいる。

手続きを終え、手招きをしたユートに続いて外に出ると、脇腹にひりつく様な痛みが走ったが平気な顔をして自動ドアを潜り抜ける。バイクの準備をしているユートに見られないようにこっそりと痛み止めを一錠飲んでおく。

「振動痛むか？」

バイクが走り出してすぐに彼が聞いてきた。バイクの振動は脇腹を中心に痛みを広げ、胃袋の傷にも響く。ただ、何より辛いのは左手が動かせず、右手一本で彼にしがみ付かなければならないことだった。今にも振り落とされそうでもとても怖い。

「痛むと言えば痛むけど、それよりも振り落とされそうで怖い」

「あいよ」

そう言うとは彼はバイクのギアを一速落とした。

僕の家は、新築だった頃よりも輝いていた。比喻表現でも何でもない、ただの事実だ。

外から見たただけだとまったく変化は無かったが、中に入るとあら大変。フローリングの床は本当に顔が映ったし、壁も「張り替えた？」と問い掛けたくなるほど真っ白になっていた。そこまでも凄いの、玄関の脇には花瓶が用意され、さらに百合の花が活けてあった。綺麗になった、風情がある……の次に思った事は『恐怖』の一言に尽きる。

ぽかーん、とした顔の僕とユートを僕のシャツを着た灰香が出迎えた。細身の部類に入る僕の服でも、さらに細い灰香が着るとダブっとして見えた。鎖骨のラインが見えてしまっているのだが、灰香は気付いていないらしい。シャツの中で体が泳ぐ度に、体のラインが浮き彫りになる。

……これは危険すぎる！

目をそつとそらす。

「服お借りしてます」

「あ、いや、それはいいんだけど。……掃除？」

「頑張っちゃった」

頑張っちゃった、のレベルはとうの昔に越していると思う。頑張りすぎちゃった、のレベルも越している可能性があるけど……。どうぞどうぞと勧められるがままに家の中に入る。

「掃除つて……ここまでくると不気味だな。やっぱおつかねえ」

靴を揃えながらユートが灰香に聞こえないくらいの声量で呟いた。リビングも完璧だった。いや、リビングが完璧って表現がオカシイのは分かるよ、でもね。積もっていた埃はナノレベルで見当たらず、テーブルと椅子がきっちり揃えられていて、流しも鏡同前まで磨き上げられているとね……完璧って言葉がぴったりくるんだ。自分の家なのに萎縮して僕が椅子に座る。

灰香がお茶を淹れに流しに行った所で、ユートが動き出した。大事そうに抱えていたバッグからノートパソコンを取り出し、携帯に繋ぐ。そして幾つか操作をした後、画面をこちらに向けてきた。

『ハシバミの樹』

そう大きくページの見出しに書いてあり、下には入口の文字。ユートが入口をクリックすると見出しが消え、『五月二十八、バイト代わってくれる人探してます』『黄炎』『猫を飼いたい人おらへんか？』『ネトゲについて語るスレ』等々の文字が現れた。それらはページの中央にズラズラと縦に並べて書いてあり、タイトルの右側についている時間表示を見ると、新しい物が上に行くようになってい

るらしい。

「何これ？」

「最初に書いてあったろ、ハシバミの樹だよ
それで全てがわかるほど僕は頭が良くない。

「いや、何コレ？」

もう一度問い返すと、仕方が無いなあという風にユートが説明を始めた。

「俺、中学三年の終わりから学校行ってなかったろ。一月頃からこのサイト作ってただよ。俺は企画立案で、相方がページレイアウトだったんだけどな。まあ、内容については姫宮さんも交えて説明した方がいいだろ」

「私がかしたの？」

紅茶を淹れた灰香がリビングに戻ってきた。僕が淹れた物の数倍、色と香りが良い。

「この間コイツに姫宮さんを助けるの手伝って欲しいって言われまして。まあ、本人の事だから俺が一気に進めちゃうのもアレかなって思って準備だけしてたんですけど。簡単に言ってしまうとコレは相互支援サイトです」

灰香に対しては何故か敬語のユートがサイト『ハシバミの樹』について説明をしていく。

「相互支援？」

訝しげに僕が聞くと。

「この町の人間に限定したののだけどな。なんか色々で見出しが出てるだろ？ この欄をいろんな奴らが見て、興味のあるモノ、手伝えそうなものに参加する訳だ。つまり」

言いながらカチリと見出しの一番上、『五月二十八日、バイト代わつてくれる人探してます』を押した。今日は二十日だから、一週間ほど先の話だ。見出しを押すとチャットページのような画面が現れ、そこには『バイト代は貰えんの？』『正確な時間帯よろ』『場所と仕事内容教えてーな』等の書き込みがあった。

「IDないと閲覧も書き込みも出来ないけどな。ID作成条件は二つあって、この町の間人であること、それから紹介者がいることだな。紹介者が認知のメールを俺か、もう一人の創始者に出して承認されないといけないわけだ。明、携帯あるだろ。アドレス送るからこのサイトにアクセスしてみてくれ」

ユートが言い終わるやいなや僕の携帯にメールが届いた。いつ送ったのかわからない、と思ったらユートは二台目の携帯を出してそこから僕にメールを送ったらしかった。ユートの指示通りサイトに飛び、そこからさらに『ID作成』に進む。

「お前ID名なんにする？」

「なんでもいいけど……」

「じゃあドールでいいか」

もたつく僕から携帯を受け取り、てきぱきと認証を進めていくユート。それから一分と経たないうちに認証を終えたらしいユートが僕に携帯を返してきた。

「見るなよ」

そう前置きしてからユートが自分のIDを打ち込んでサイトに入る。そして暫く経つと、僕の画面に『新しいフレンドが入会しました。ID名はドール。皆、仲良くしてやってな』と文字が横に流れて行った。

「入会終わり、と。さて、本題に移るか。相互支援つてとこ押してくれ。そうそう、そしたら『友達が困ってます。助けて下さい』みたいな感じで申請して……オツケー。画面に表示されたわ」

今まで一番上だった『五月二十八日、バイト代わってくれる人探してます』が一つ下がり、その上に『友達が困ってます。助けて下さい』という欄が新たに加わった。支援要請者の場所には『ドール』の文字。

「入会したてのやつには興味津々だからな。すぐ閲覧者数増えるぞ」ユートの言葉にふと違和感を覚え彼の横顔を見たが、瞳に映る文字が凄まじい速度で移動しているのを見て画面に目を戻した。はつき

りとはしない、そう、嘘でもなく真でもなく、その中間のような気配を感じたのだ。だがそれも、滝のように流れ落ちていく名前の羅列を見ているうちに忘れてしまった。

閲覧者数の数が跳ね上がり書き込みも倍増していく。閲覧者数が三百を超えた辺りで『なにに困ってるの?』という書き込みで画面が一杯になった。

「理由は明かせないけど、駅前の出版社に集まってほしいって打てその通りに書いた 次の瞬間。

黄龍：『ハア? 意味わかんねーし』

ひじき：『理由明かせないけど集まってく……都合良すぎじゃん?』

メリリ：『別にアタシたち、君の為に働く義理とかないんだけどお』

怒 文字 否定的 失敗

連鎖

人 存在 文章 雪崩 洪水

反響

文字 乱打 乱打乱打 乱乱乱打打文字 攻撃

……

……画面が否定的なコメントで一杯になった。遂には画面に大量の虫が這いまわっていると勘違いするような文字の移動が始まった。

画面の中の文字から伝わる悪意、怒気、それらを感じ取って背筋がぞわぞわとした。

いるのだ。

画面の向こうにはキチンと人が、いるのだ。

画面だから、画面越しだからと舐めていた。何も出来やしないと高をくくっていた。

甘かった だが、今更それを思ってももう遅い。ユートの言うとおりにやってみたが、これでは完璧に失敗だ それをユートに言おうとして彼を見ると、

「ふふん 盛り上がったる盛り上がったる」

と、実に楽しそうに笑っていた。そのことに対して憤りの声を上げようとした時、

ユート：『どうも、管理人です』

というテロップが文字の上から、チャットではなく画面を横に流れで行った。先ほど会員登録をした時にも見た現象。管理者権限、というやつだろうか。

ユート：『てか、文字打つの一旦ストップ、ストップして画面酔いしそう！』

流れ落ちていく文字の速度が、量が、怒気が減少していく。

ユート：『はい、オッケー。あー、それですね、先ほどのドール……は私の友人でして。彼が言っている内容はそんな馬鹿にしている、とかではなく、本当に、人の命が掛かっている類のものなんですな』

シン と。

聴こえる筈もない静寂の音を感じた。全員がユートの文字を目で追っていく、その事だけに集中しているような、何らかの一体感が僕を包んでいた。隣で画面を見守る灰香も、何事が起きているかあまり理解しているようではなかったが、それでもただの文字からそれ以上の何かを得ようとしているようだった。

「……ユート、ID名もユートなんだ」

その一種異様な空気に耐えかねたように僕が問い掛ければ、

「ああ。俺がはじまりで、人を勧誘してたのも俺だから名前出さないと信用なくな」

画面から目を離さず、打鍵の速度も落とさずに答える。

ユート：『嘘じゃないです本当です。もし疑うなら、疑うなら部屋を出ていけばいい。どうせ皆、顔も知らない赤の他人だ。ここのサイトを利用するのは善き者だけがいい』

なんて一方的な文句を画面の向こうの誰かに叩きつけ、

ユート：『もしくは、善き者になりたいやつ』

そして勝手に救う。今この世界は、少なくとも僕にとってはサイトに支配されているように感じられた。
絶対王政。

そんな言葉が脳裏に浮かび、カリスマという言葉で上書きされる。

ユートは天才だ。それを今、改めて認識していた。

ユート：『このサイトを何で俺が作るうと思ったかわかるか？』

間髪入れず、

ユート：『お前らには教えない……教えても、今のお前らじゃ理解できない』

数瞬開けず、

ユート：『ありきたりな台詞で申し訳ないが、ドールの支援要請に協力すればこのサイトを作った目的の一旦は掴める筈だ。勿論これは強制でも強要でもない。サイト『ハシバミの樹』はあくまでも相互支援を、人と人の助け合いを円滑にするサイトだ。だから、参加の有無は自分で決めてくれ』

書き綴り、誰の返信が来るよりも速く、ユートはログアウトをクリックした。

メリリ：『あー』

メリリ：『とりあえず、聞くだけ聞いてみない？ 強要でも強制でもないんだからさ、もうちょい詳しく聞いた後行動しても問題ないっしょ』

同意する発言が幾つくか続く。

「灰香どうする？」

「どうする……って私」

「義母との話し合いをいつやりたい？」

「もしかしてこの友達って私？」

「もちろん。もし、騒ぎを大きくしたいならここで止めればいい」

「困るのは支援要請を出した明と煽った俺だけだ。なあに、止めたところで屁でもない。明がもしまたこのサイトを利用したいなら新しくIDを登録すりゃいいし、俺は批判なんて気にしないし、それ

で自分が困るような状況には絶対させない」

僕の言葉をユートが引き継ぐ。どうする、という風に灰香を見た。

「明日」息を吸い、「明日がいい」

「明日って、正確には？」

「とりあえず、サイト内の流れが滞らないように昼ごろって打つとけ」

ユートの旨を画面の流れが停滞した時を狙って打つ。

ドール：『明日の昼ごろ集まって欲しいんですけど』

黄龍：『昼ごろって、正確には？』

「何時ごろ？」

「あの、えっと。咄嗟に答えちゃっただけで大して考えてなかったの。ごめんなさい」

しゅん、と灰香が俯いた。左目の端に彼女を見ながらも、右目はパソコンから離せない。次の文字を待つ群衆の息遣いが聞こえてきそうだ。

「あー、とりあえず十二時って打つとけ。そこらへんなら矛盾しないで色々に対応しやすいだろ」

ドール：『十二時ごろです』

米粒：『オツケー』

何名かが同意を示した。その同意に交じって、今までとは違う趣旨の発言が混ざっているのに気付いた。

惑星直下型：『てかさあ、何でドール片言なの？』

ドール：『人と話すのに慣れてないからです』

きゆうり：『いやま、わかるよ、アタシもヒッキーだから。でもコレって実際に会ってるわけでもないから緊張しなくていいっしょ』

ドール：『いや、あの、その、でもみなさんは実際にいるわけで』

惑星直下型：『……天然だ』

メリリ：『天然だね』

西瓜：『かーいーねー』

そして始まる質問ラッシュ。対応しきれずユートに救いを求めて見

れば、

「参加希望者は俺にメール。後はログアウト」

と指示が飛んだ。言われるがままに書き込みついでログアウトをし、
する際に閲覧者数を確認したら。

「凄いね、五百人以上がこのチャットに参加していたんだ」

「正確には五百三十七人。さて後は俺に任しとけ」

軽く胸を叩いたユートが笑い

ハシバミの樹（後書き）

ここまでお付き合い頂き恐悦至極。

そろそろアイツが出てきます。そうアイツ！ 名前すらまだ出てないのに悪役っぽい、アイツ！

群勢

12

翌日、午前十一時四十分。

出版社近くのコンビニで僕は立ち読みをしていた。無論、立ち読みそのものが目的ではなく、窓の外、出版社近くにどれくらい若者が集まってきているかを見極めるためである。約束の刻限にはまだ時間があるものの、出版社前の広場には既に二十人程度の若者が集まっていた。

駅前には小さな広場になっており、駅からは三本ほど道が伸びていて中央の一本が広場へと通じている。その丁度正面に僕がいるコンビニがあり、他の二本はそれぞれ右と左へと別れていて、右へと延びる道は街の北側方向に、左へと延びる道は街の南側へと延びる道となっていた。出版社は駅から見てやや左側に建っており、細長い形をした八階建てのビル。出版社と大きく括ってしまっていたが正確には雑誌等を手掛ける所だ。

十二時三分にコンビニから出て広場に入る。若者たちは既に百人を超していると見られ、広場の外に溢れ出していた。コンビニから出て初めて気付いたのだが、彼らは一塊になっているわけではなく、おおよそ三つのグループに別れていた。

見るからに不良と分かるグループは出版社前にたむろして座っている。数は四十弱。

広場ギリギリに固まっているグループはどうやら野次馬根性丸出しらしく、深く関わる気はないと見て分かった。数は三十弱。

そしてそれら二つの、どちらでもないグループはてんでバラバラに広場のあちこちに散らばっていた。まるで統率感がないが、数は最も多く六十人を超えている。

と。三つ目のグループの中ほどにユートを見つけた。彼は周り

にいた誰かと談笑していたが、僕を見た瞬間にポケットに手を突っ込み何事か操作をした。元からセットしてあったのだろうソレはワントッチで動作を果たした。

最初は小さな音だった。小さな「ピリリ」という音が鳴り、鳴り終わる前に他の音に繋がり、やがて喧しい程の音量になり、バイブの振動は大気を揺らした。着信音の大合唱。

メールをチェックし終えた全員が、それまででんでバラバラな方向を見ていた視線を一カ所　出版社へと向けた。そして、ぞろりと囲みこむように詰め寄った。

メール到着より十秒にして、圧倒的な肉の壁が出来上がっていた。僕は出来上がる壁に飲み込まれるようにして前に進み、二・三人しか前にいない比較的前の方まで進んだ。

それまで不穏気な気配を感じながらも行動に移していなかった警備員が何事かを言った。

……が、聴こえない。

警備員までの距離は僕の位置から三メートルほどであるのに、警備員の声が聴こえない。完全に萎縮してしまっている。見ていて可哀想な程に。それを見て前方にいた不良風の若者たちが小馬鹿にしてゲラゲラと笑った。

そして笑いは、波及した。

別に何が可笑しいわけでもないのに、全員が全員、雰囲気呑まれるがままに笑い出した。萎縮していた警備員がさらに縮こまる。

ゲラゲラと笑い終え、気付けば辺りは蒸し暑かった。人が出す熱気が高ぶり、熱いと思える境地に達している。

何事かが起こってしまう一種不穏な空気が辺りを包み、しかしそれが心地よい。

当然だ。

何事かを起こすのは、僕たちなのだから。

万事を為すのは、僕たちなのだから。

携帯に二度目の着信　『虐待つて連呼してくれ。次のメールがき

たら全員ダツシユで逃げ、な。多分警察きちやつから捕まらないようにお願いします。』

誰かが手拍子を取った。

1、2、3、ハイ

「虐待」

耳鳴りが頭蓋を抜けた。

「虐待」

声が風圧と化して前に飛ぶ。

「虐待」

警備員の顔が苦痛に歪み後ずさる。

「虐待」

心の何処かに、破壊的で倒錯的で満たされる気持ちが現れた。

後は……語る言葉を持たない。

語れるとすれば、道行く人は全員が全員立ち止まってこちらを見、ユートが懸念したように警察が来て、そんな状況にも関わらずこれはお祭りだった。

神を祭るわけでも、何かを祈願するでもない、過去の事例を手にするなら「ええじゃないか」江戸の終わりに起こった謎の現象。それが最も近い答えだった。

身体が火照り汗が流れ、

喉が枯れ果てるまで叫び、

誰が取り出したかもわからないリズムで体を揺らす。

声を出し体を動かすだけの、最も原始的な祭り。

実質は祭りではないのかもしれない。

だけど、そう感じられる限りこれは祭りのようなものだった。

もう虐待なんて単語を叫んでいる声は聞こえない。意味不明な音が連続しているだけだ。

僕は目の前の人と人との隙間を縫うようにして前に進む。最前列を越して、今や出版社前の扉に背をびったりつけている警備員さんに話しかける。

「………？」
「……？」

聴こえてなかった。そして聴こえなかった。僕は薄く笑いながら、警備さんは困ったような顔をしながら、同時に首を傾げる。警備員さんの耳元に口を近づけかなり大きな声で喋る。

「この手紙を、姫宮蓮華さんに渡してください。そしたら僕らいなくなるので」

本当かい？ と問い掛けるような目の警備員さんはチラリと僕の後ろを見て、諦めたように出版社内に入っていた。

つ、と視線を上にあげれば、出版社内の人が窓から僕らを見下ろしている。戸惑う顔の人々が大半の中、四階にいる女性だけが妙に冷静な顔をしてこちらを見ていた。そして誰かに呼ばれたらしい女性は窓から離れて行く。それから数十秒して警備員さんが戻ってきた。手紙を渡した旨を僕に伝えると、今度は出版社の中に入り扉を閉める。

それを見て揶揄するような声を上げている彼らに向き直り、群衆のどこかで僕を見ている筈のユートに片手を振り上げた。腕を振り上げる途中で携帯に着信。「限界だ」と群衆のざわめきを透過してユートの声が聴こえる。携帯に振動を感じた瞬間に全員が後ろを振り返り、走り出した。

蜘蛛の子を散らすようにという表現がしっくりくるような逃げっぷり。逃げている途中で目にしたのだが、数人は警察に取り押さえられていたらしい。だが、一斉に動き出した若者たちの波に吞まれて警察は彼らを離してしまったようだ。全員が全員、無事に逃げ出せていた。

熱気冷めやらぬ様子の彼らは次第にバラバラになり、いつしか僕は一人で繁華街の片隅いた。額から流れる汗を拭い、ユートと話した計画の次の場所へと歩を進める。

十一時の半ばから異様な気配を窓の外に感じてはいた。だけどそれは勘のようなものだったし、取り立てて何かをするほどの物ではなかった。広場に少年や青年がたまるのは往々にしてあったし、今回は少しばかり規模が大きかっただけなのだから。

「ただ、そんな樂觀的な観測も十二時を少し過ぎた辺りで吹き飛んだ。」

「コレは……何なのだろう？」

事態を理解するのに暫くの時間を要した。だが、若者たちの群れから少年が一人出てきたところで合点がいった。

「一体どういう繋がりで彼らが集まっているのかは知らないが、恐らくは、多分ではなくほぼ確実に、私の義理の娘が起因であることは確かだった。」

「刺されたやつが、刺した相手を助ける為に動くのか……はぁん」
見下して、見下ろした。大したことないと証明するように息も吐いた。

「では、私の胸に渦巻く言い知れぬ不安はなんだろうか。」

「姫宮さん！」

そんな私の胸中の不安を突き刺すような声が跳んだ。振り返れば文章校正担当の男が私を呼びつけていた。男の方が私より年上だが、

「さん」付けなのは私の方が役職が高いからだ。

「警備がコレを姫宮さんに渡させて」

「コレ、とは手紙だった。受け取り寄ってくる人を手で追い払いながら一読してみる。」

『貴女が義理の娘にした事は全て知っています。集まった若者達と若者達が言っている言葉の意味が、理解できるでしょう？ 全てがお分かりになりましたら、繁華街のホテル・グレネツセ五 七号室に、本日午後十一時にお越し下さい。聡明な貴女なら、来なかつた場合私たちがどのような手に打って出るかは容易に察する事ができるでしょう。』

「脅迫文か……」

一枚綴りの便箋をヒラヒラと動かしながら言った言葉が、左隣にいた女性に聞こえたらしい。ぎよつとしたような顔を私に向けてくる。出版社に脅迫文が届くのは珍しいことではないが、流石にこんな騒ぎになったことは無かったから不安なのだろう。

私だって、不安だ。

そんな思いを内に留め、フロアチーフに声を投げかける。

「チーフ、私今日早くに抜けていいですか？」

外とは裏腹に静まり返った室内に私の声は良く響く。そしてフロアチーフがゆっくりと、苦虫を噛み潰したような顔をしながら頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6817x/>

ハシバミの樹

2011年10月21日09時15分発行